

平成二年五月吉日（一九九〇）

從四位  
勲二等  
田中清一翁  
顯彰銅像  
建立記念誌

田中清一翁顯彰会







従四位  
勲二等  
田中清一翁顕彰銅像（碑文）

田中清一翁は、昭和二十年八月終戦の大詔を拜して日本再建を念願、山岳高原地の多い国土を立体的に使用すべく、日本の北端から南端まで中央背部を縦貫する高速道路を建設し、その沿線において新都市の建設、新農地等の造成、諸資源を開発する企画案を「平和国家建設国土計画大綱」と表題して政府に献策す。

当時の連合国総司令部は、この田中プランを評価し、その「立体模型」の作成を要望、田中翁の制作した模型を中心に昭和二十四年十月、国土開発展覧会を開催し、天皇・皇后両陛下のご来場をいただき、お言葉を賜わる。

田中翁は、国民運動を盛り上げるため、国民各層に対する講演に全国行脚するとともに「国土建設推進連盟」を結成し、国会に請願書を提出。昭和二十九年建設省内に「中央道調査審議会」が設置され、「国土開発縦貫自動車道建設法案」が、国会で昭和三十三年全会一致で成立す。田中翁は道路建設を推進するため昭和三十四年参議院全国区から立候補して当選、国会活動を行なって、プラン実現に努力し、任期満了にて下野、「勲二等瑞宝章」を賜わる。

畢生を国土開発に尽瘁した田中翁は、昭和四十八年十一月二十七日、忽然と世界享年八十一才、「従四位」を追叙される。

計画高速道路のうち、昭和四十二年から着手した「中央高速自動車道」の最大難工事だった「鬼那山トンネル」は昭和六十年三月に完工し、全区間の開通実現全球の歡喜、田中翁の功績を後世に伝えるため、東海地区は岐阜・長野両県に引続き、此処に顕彰銅像を建立す。

田中翁は、福井県出身、株式会社富士製作所創立者、沼津商工会議所会頭等の要職を歴任し業界の振興、社会事業の推進に貢献多大な実業家であった。

平成二年五月吉日

田中清一翁顕彰会会長 静岡県知事 斉藤滋与史



東名高速道路沼津I.C.入口より

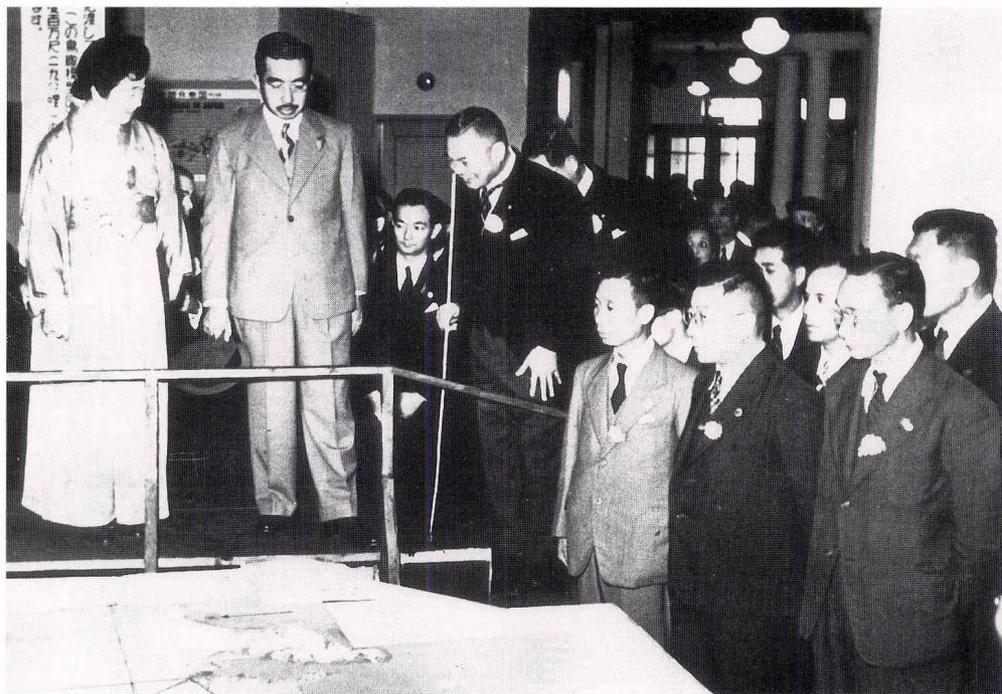
## 日本全土立体模型原図



◎ これは「日本全土立体模型」(20万分の1・石膏製)に製作した図で、左頁の「国土計画展覧会」に出展し、「天皇・皇后両陛下」がご台覧になった立体模型の原図です。

この道路計画は(15頁)の説明をご参照下さい。

## 天皇・皇后両陛下に「田中プラン」を御説明申し上げる田中企画者



### 国土計画展覧会 (東京日本橋・三越会場) 昭和24年10月20日

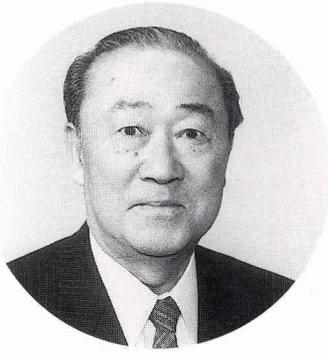
連合国軍最高司令部 (G・H・Q) 主催で開催され、田中プランの重要出品である「日本全土の立体模型」(20万分の1・石膏製)を企画者の田中清一氏が天皇・皇后両陛下に詳しくご説明申し上げました。

これはG・H・Qの天然資源局長スケンク中佐が「両陛下」を会場にご案内されました場面です。

### 日本国立体模型

昭和22年4月「平和国家建設国土計画大綱」がG・H・Qにて検討された結果、「日本再建のマスタープラン」として天然資源局に担当を命ぜられ、更にこれを一目で見えるように「立体模型」の製作を田中企画者に要望され、2ヶ年余日を費やして24年8月に完成されたので、これを中心に上記の「展覧会」が開催されました。





## 式 辞

田中清一翁顕彰会

会長 齊藤 滋与史

新緑の佳き日、田中清一翁の顕彰銅像の除幕式に当たり、公私ご多用のご賓客、ご縁の深い関係各位、銅像建立にご協力賜った多数の皆様と共に「除幕式」を盛大に挙げていただきますことをお慶び申し上げます。

田中翁は焦土と化した日本再建に取り組まれ懸命な苦心の結果、構想の企画を「平和国家建設国土計画大綱」として政府に提案し、「国土開発縦貫自動車道建設法」を成立させ、全国各地の道路が高速近代化されて、今日の産業発展と文化の向上を招きました。

この田中翁の偉大なる国家への貢献と功績を永く後世に伝えんと、昭和六十年、「田中清一翁顕彰会」が結成され、先ず、中央高速自動車道の「生みの親」として岐阜県・長野県で建立された「田中翁顕彰碑」の除幕式に招かれ、両県の熱心な活動に感銘を受けつつ、当静岡県東駿地区での顕彰銅像の建立も立案され、今日の除幕の運びとなった次第です。

ここに至るには、顕彰会の皆様には多大なご苦勞をお掛けし、また顕彰銅像建立に際しては会員をはじめ各社に絶大なご協賛を賜り、有難く厚くお礼申し上げます。

最後に今後の顕彰会の発展を祈念して式辞といたします。

平成二年五月吉日

## 田中清一元参議院議員をしのんで

前建設大臣 原田昇左右

一 田中元参議院議員は、終戦後国土再建のための具体的方策について独自の見識を有し、国土開発縦貫自動車道建設構想を提唱された方である。同構想は、我が国が平和国家として立ち行くためには、食糧の面で自給自足できなければならず、そのためには全土の山岳地帯に、縦貫・横断の高速道路を建設し、全国的な道路網を完備し、高原や丘陵に住宅を造り、平坦な地を農地とする必要があるとするものであった。

二 田中氏の構想は、雄大かつ画期的なものであり、また、山岳部を貫通するという点で技術的困難性をも伴うものであったが、国土の普遍的開発を図るため高速道路を建設すべきであるという考え方は、当時の国民に大いにアピールしたところであり、昭和三十年六月の第二十二国会に衆議院議員四百三十名からなる超党派の議員提出法案として「国土開発縦貫自動車道建設法案」が提出されるところとなった。

同法案は昭和三十三年初春成立したところであるが、その後、「東海道幹線自動車国道建設法」をはじめとする高速道路建設法が成立し、昭和四十一年夏には、これらを統合した「国土開発幹線自動車道建設法」が成立し今日に至っている。

三 高速自動車国道は国土の開発及び国民経済、社会の向上に今日まで多大の貢献をしてきたところであり、供用延長は、現在、四千五百キロメートルに達している。こうした高速自動車国道の整備の出発点が田中氏の構想にあったことを顧みると、氏の業績は、誠に大きなものであったことができ、今後、氏の構想を更に発展させるべく、高速自動車国道全体のネットワークの完成に向けて努力して参りたいと考えている。



## お祝いの言葉

日本道路公団総裁 宮 繁 護

静岡県知事齊藤滋与史様を会長として、田中清一翁顕彰会が設立され、田中清一翁ゆかりの地沼津に顕彰銅像を建設されました。今日の佳き日に除幕式を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

田中清一翁の御功績につきましては、今更申し上げるところではございませんが、ただいま概成いたしました青森から鹿児島までの縦貫高速道路について、終戦直後に「平和国家建設国土計画大綱」を政府に献策されるなど、ただいまの「国土開発幹線自動車道建設法」に至る高速道路建設法制定に尽力され、平成二年当初で全国に供用を開始しております四、六六〇キロメートルの高速道路実現に多大の貢献をされたのであります。

田中清一翁の功績を顕彰されまして中央自動車道の飯田インターチェンジ、神坂パーキングエリア付近に顕彰碑を建立されたのに引き続きまして、東名高速道路の沼津インターチェンジの入り口に顕彰銅像を建立されたことは、沼津インターチェンジが東海の交通の要所としてたゞいま一日に二六、〇〇〇台のお客様に利用されていることから誠に好地に建立されたものと心からお祝い申し上げます。

今後の高速道路の整備につきましては、平成元年に国土開発幹線自動車道建設審議会が開催されました第二東名・名神をはじめ新たに基本計画一、三六四キロメートルが決定されまして、全体で八、五九〇キロメートルの基本計画になり、これらの計画的建設を当公団として整備推進して参ります。

特に、第二東名・名神の整備につきましては、建設省での、できるだけ早い整備計画の策定を待ちまして、当公団としても早期に着工したいと考えております。新たに第二東名・名神の策定が推進されておりますときに、田中清一翁の顕彰銅像が建立されましたのも、田中清一翁の業績が誠に偉大であったことに改めて敬意を表するものであります。

平成二年五月十八日

## 田中清一翁顕彰碑の建立に寄せて

静岡県議会議長 和田淳一郎

日本国土の再建に貢献せられた田中清一翁の顕彰碑の建立が進められ、ここにめでたく竣工いたしましたことを心からお喜び申し上げます。

顕彰碑の建立は、翁の偉大な功績を称え、後世に伝えるために組織された「田中清一翁顕彰会」の皆様のご尽力によるもので、会長の斉藤知事はじめ、役員並びにご協力賜りました関係各位に敬意を表する次第であります。

戦後のわが国は、荒廃のなから立ち上がり、世界各国が瞠目する驚異的な経済成長を遂げて今日に至っております。

顧みますに、田中翁は、戦後まもない昭和二十二年、荒廃したわが国土を再建すべく、国土の均衡ある発展を図るには国内全域に亘る高速自動車道の建設が基本であるという、「平和国家建設国土計画大綱」を企画発表するとともに、その実現に向けて、私財を投げ打って運動を展開されました。

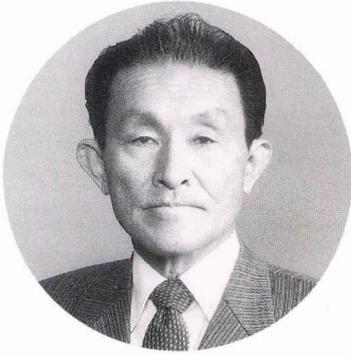
この田中プランは、当時の国情から考えますと、あまりにも雄大な構想ゆえに、容易に受け入れられず、逆に批判された面もありましたが、翁の不撓不屈の精神は、昭和三十四年国会議員に当選するや、このプランの早期実現に向けて、東奔西走し関係方面に強く働きかけたのであります。

翁の努力により、この偉大な計画は次第に人々の注目を集め、「田中プランの実現」の要望は、国民運動にまで発展いたしました。

こうして翁の勇気と情熱は、内外政財界を動かし、当初難色を示していた建設省もこれを認め、四十一年九月には、翁が特に緊要であるとしていた中央自動車道の建設に着手、十八年を経た昭和六十年三月、最も困難を極めた恵那山トンネルが完成し、田中プランの夢はついに実現したのであります。今日、こうして田中プランが、中央高速道、東名、名神高速道などとして続々開通、具体化されている現実をみると、翁の先見の明と先覚者としてのご苦心、ご努力、更にはわが国のめざましい経済成長に大きな役割を果たした功績に対し頭の下がる思いがいたします。

田中翁は、念願の中央高速道の開通を見ることなく他界されましたが、このゆかりの地沼津に顕彰碑を建立し、翁の偉大な功績を称え永く後世に伝えることは、誠に意義深いことであります。

改めて、翁の御遺徳を回顧しつつ、この顕彰碑の建立にご尽力下さいました関係の方々から感謝申し上げます次第であります。



## 田中翁顕彰銅像の建立に寄せて

沼津市長 渡 辺 朗

風かおる季節のなかで、国土開発に一身を捧げた田中清一翁の顕彰銅像が、当地に建立されますことを、心からお祝い申し上げます。

申すまでもなく、戦後逸早く我が国が平和で文化的な生活ができるようにと、全国に高速自動車道を完備し、国土を立体的に利用することを提唱したのが、田中翁でありました。これは、我が国の将来の方向を明確に示したものであり、その結果、世界に類のない経済成長を遂げることができたと言っても過言ではありません。

現在、二十一世紀をめざす国土づくりの一環として、創意工夫を凝らした地域づくりを進めながら、交流の拡大による地域相互の分担と連携を深める交流ネットワーク構想を、国をはじめ自治体・民間が一体となって進めているところであります。いわゆる多極分散型国土の形成やふるさと創生であります。この国土づくりの背骨となっているのが、今日着々と整備されております高規格道路網の建設といえます。

この構想を見ましても、「田中プラン」の主張が、高度成長を遂げた今日にあっても脈々と流れており、今さらながら先見性と不屈の精神をもった田中翁の偉大さに敬服せずにはいられません。

私たちは、田中翁の残してくれたかけがえのない功績を顕彰するとともに、次代に確実に引き継いでいく必要があります。そして我が国が、また我が郷土が、益々豊かになって飛翔しつづけるように、都市づくりに邁進していかねばならないと、決意を新たにしているところであります。





## 田中清一翁顕彰銅像除幕式ごあいさつ

駿東郡町長会会長  
長 泉 町 長 高 橋 正 三

新緑の佳き日、待望の田中清一翁の顕彰銅像が建立され、茲に除幕式が行われることを心からお慶び申し上げます。

田中翁は、新日本建設のため国土開発について熟慮され、その解決策として「全国道路網」建設を提唱され、特に中央高速自動車道の創設を力説されたことは、正に比類なき先見の明でありました。

この「中央高速自動車道」の完成は、田中翁を「生みの親」として既に岐阜県、長野県で顕彰碑を建立されました。また、翁は戦前から沼津市に工作機械と木工機械の近代的な工場を建設され、麗峰富士にちなみ商号を「富士製作所」と改称し、住居や諸施設を構えるなど、この地域をこよなく愛し、地域の政治、経済、産業にも大きな影響を与えました。

今後、この記念碑が翁の遺徳をとこしえに伝えるとともに、翁のご意志を私達みんなの手で育てていきたいと願っております。

## 祝 辞

沼津商工会議所会頭 宇野三郎

本日、ここに当商工会議所の元会頭であります田中清一翁の日本平和国家建設国土計画の先駆者としての功績を称えた銅像が、建立されますことを心よりお喜び申し上げます。

また、この銅像の建立にご尽力いただきました顕彰会の役員の方々をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

田中清一翁が終戦荒廃した日本国土再建のために、狭い国土の立体的な活用と均衡的な開発として、全国規模の「高速自動車道路網」の完備を提唱され、その実現に努力されましたことは、モータリゼーションの到来とともに今日の未曾有の日本経済発展の原動力となったこと、皆様周知のとおりです。

ここにあらためて地元の生んだ偉人、田中清一翁の先見性とその功績に対し深く敬意を表すものです。

思いおこせば、当所第四代会頭として、昭和三十一年三月より昭和三十四年九月の任期中、静岡県商工会議所連合会あるいは、関東地区商工会議所連合会、更には、国土計画懇談会の席に労をいとわず出席、田中プランを広く紹介し熱心に説かれたお姿は、聞くものに大きな感銘を与えたと伺っております。

さて、沼津を中心とした当地区は、日本産業経済の重要な地域としてはもとより、高度情報化・余暇時代の到来により首都圏との距離が短縮され、地域としての需要・期待が一層高まってきております。

このような状況下にあつて、東駿河湾環状道路や伊豆縦貫道路の建設、第二東名道路計画の具体化など社会資本の充実、整備が大きな課題であり、その実現が急務と言えます。

どうかこれを機会に、私たち一同が先人であります田中清一翁の意を受け継ぎ、地域発展の財産として後世の人々に残せましよう、これら実現に向けて努力邁進したいと思っております。

終わりに、田中清一翁顕彰会の皆様のご活躍と、当地域のご発展ご繁栄をお祈り申し上げ私のお祝いの言葉といたします。

平成二年五月吉日



## 田中翁をしのび

自由民主党沼津支部

支部長 岡田吉信

終戦後の我が国の状態は、極度に混乱し、産業は衰退、国力は疲弊して、食料不足も重なり、人の心は不安な時代でした。

そんな時に、田中清一翁は、日本全土を大改造する総合国土計画案を時の政府に提出されました。

当時のマスコミ報道界では、誇大妄想とか、一部の新聞では、奇人扱いにした記事もありました。しかし先生は、各地での講演会をなされ、又その為の行脚を続けられました。その先生の熱意と田中新日本建設の構想が理解され、田中プラン実現の要望が国民運動に発展していききました。

友人代議士の力添えもあり、時の政府当局の関心も深まりました。沼津市でも全国各地の有志が集まり、田中プランの実現を期して「国土建設推進連盟」が結成されました。

全国の道路網が高速近代化する案に企画され、田中翁は第一期工事とされた「東京―神戸間」を最短距離で結ぶ「中央高速道路」に一層の努力をされたと思います。それには、食糧問題、資源開発等々と幅広い計画があったと思われます。

私は昭和六十三年十月に長野県飯田市で、田中翁の顕彰碑の除幕式に静岡県の田中翁顕彰会の会長齊藤滋与史知事の代理として、祝辞を述べる光栄に浴した折に、いかに長野県の飯田市の近郷の皆様が、田中翁に対して、それまで「陸の孤島」と言われた伊那谷の人々を含めて、待望の地域振興の黎明がもたらされたか、企画者の田中清一翁に深甚なる謝意と敬意を捧げられていた事に感銘を受けました。

この度、沼津市に田中翁の功績を永く後世に伝えんが為、永年の念願でありました「顕彰碑」を建立する事が出来ましたことは、関係者の一人として心から喜んでおります。



## 祝辞と皆様へ御礼

田中清一翁顕彰会

常任理事代表 渡 辺 新 作

(静岡県議会議員)

「新日本建設」の雄大なる国土計画「田中プラン」を、終戦直後から提案されたことは地元  
の沼津政界では、往年の名取市長から勝又干城市長、更に塩谷市長、原精一市長時代へと、評  
価が大きくなり、私は田中翁が自民党沼津支部長のとき幹事長を任せられて知遇され、更に市  
政・県政へと役職が進むとともに、田中プランに関して、田中翁から近親的な参画に遇せられ、  
大往生されるまで深いご因縁となったことを感慨無量に思います。

田中プランは、当初「夢の企画」と酷評されたが、全国交通網の近代化のうち新建設となっ  
た「東京―神戸間」の「中央高速自動車道」は（中央道）と呼ばれ、特に「恵那山トンネル」  
の難工事で有名となりました。

昭和五十八年四月、地元の熱心な田中ファンにて「中央道視察団」が編成され私を団長に  
「一泊二日」のバス旅行にて全行程を視察中、「恵那山トンネル」は日本道路公団の飯田所員  
が同乗され「このトンネルは沼津の田中清一さんの企画提案で出来た」と説明され、岐阜県側  
に出ると施工中の「第二トンネル」の坑口を指して、「六十年に竣工するから、文字通り『高  
速運転』で便利になる」と説明され、田中翁の偉業に一同が感嘆されました。

この日の宿舎で、六十年には田中翁の「十三回忌法要」が行われると知り、沼津商工会議所  
会頭や参議院議員として国会活動もされたので、「田中翁顕彰会」を設け市民参加で行うこと  
を要望され、早速にこの準備をすることになりました。

衆望により幸い元建設大臣の齊藤滋与史先生が会長にご就任下さったので、多数のご協賛と  
なり、田中翁の法要、岐阜・長野両県にて建立される「田中翁顕彰碑」除幕式の参加と続き、  
東海地区では此処に「田中翁顕彰銅像」が建立され、各会社、各位の絶大なるご協賛を賜った  
おかげで完成したことを、理事一同からお礼申し上げ、祝辞にさせていただきます。

平成二年五月吉日

## 謝 辞

新緑の佳き日、亡父田中清一儀の業績に対し、立派な「田中清一翁顕彰銅像」の建立を賜り、斉藤県知事様を始め顕彰事業にご尽力ご協力を下さいました皆様と、ご来賓各位多数のご臨席を頂き、盛大な除幕式を挙行下され深く感謝申し上げます。

かかる榮譽に浴せますのは、斉藤滋与史先生を会長に静岡県東部の団体企業及び有志多数の皆様が、その業績を後世に伝えようと「田中清一翁顕彰会」を結成下され絶大なご理解とご賛助により、顕彰銅像が完成され今日を迎える事が出来ました。ここに遺族を代表し衷心より感謝申し上げます。

父は、福井県大野郡和泉村に生まれ、青年期は家業の林業で育ち、若くして大阪市の谷藤田組にて製材木工の機械化と設計技術を習得して独立し、当初大阪製材機工作所の商号で創業し、事業の発展とともに工場を静岡県沼津市に建設し、「株式会社富士製作所」の基礎となりました。また、会社経営とともに、日本の平和国家建設を叫び昭和二十年の終戦とともに日本再建を構想して「平和国家建設」の具体案を政府に献策し、この田中プランの実現に一生を捧げました。

念願の全国縦貫自動車道路網は殆どが計画どおり完成されつつあり、なかでも難工事が予測された「中央高速自動車道」の「恵那山トンネル工事」も関係者の技術開発とご努力の結果、昭和五十年開通いたしました。工事の完成を待ちわびつつ、昭和四十八年十一月他界いたしました父の遺影を抱き、思い出多い中津川市、飯田市の開通式に参加させて頂き、工事の立派な出来映えを喜び合いました。

本日ここに、地元の皆様が多大なご尽力により高速自動車道路と霊峰富士の眺望が見渡せる東名沼津インターチェンジに父田中清一の顕彰銅像を建立賜り、平和国家日本の繁栄を願った故人も喜んでいる事と存じます。

除幕式にあたり、ご協力頂きました皆様に心より感謝申し上げます御礼の言葉といたします。

平成二年五月吉日

田 中 清 正

目次



口絵 カラー写真

式 辞

田中清一元参議院議員をしのんで

前建設大臣

お祝いの言葉

日本道路公団総裁

田中清一翁顕彰碑の建立に寄せて

静岡県議会議長

田中翁顕彰銅像の建立に寄せて

沼津市長

田中清一翁顕彰銅像除幕式ごあいさつ

駿東郡町長会会長

祝 辞

田中翁をしのび

自由民主党沼津支部支部長

祝辞と皆様へ御礼

田中清一翁顕彰会常任理事代表

謝 辞

岐阜県東濃地区の顕彰碑

長野県飯田地区の顕彰碑

「平和国家建設国土計画大綱」

「平和国家建設国土計画大綱」の実現について

田中清一翁経歴

田中清一翁顕彰会設立趣意書

日本再建に貢献された田中翁顕彰の募金趣意書

田中清一翁顕彰基金御芳名簿

田中清一翁顕彰会役員名簿

御他界された役員

経過報告

除幕式を迎えて

編集後記

添記資料

・「国土計画田中プラン」をテレビ放映

・田中翁顕彰会の視察記録

・「日本道路公団」との関連記事

・宮崎日日新聞記事

・静岡新聞記事

・日刊工業新聞記事

・「平和国家建設国土計画大綱」

・財団法人「田中研究所」役員芳名

12

13

14

15

42

46

47

48

57

61

62

67

68

69

70

72

74

75

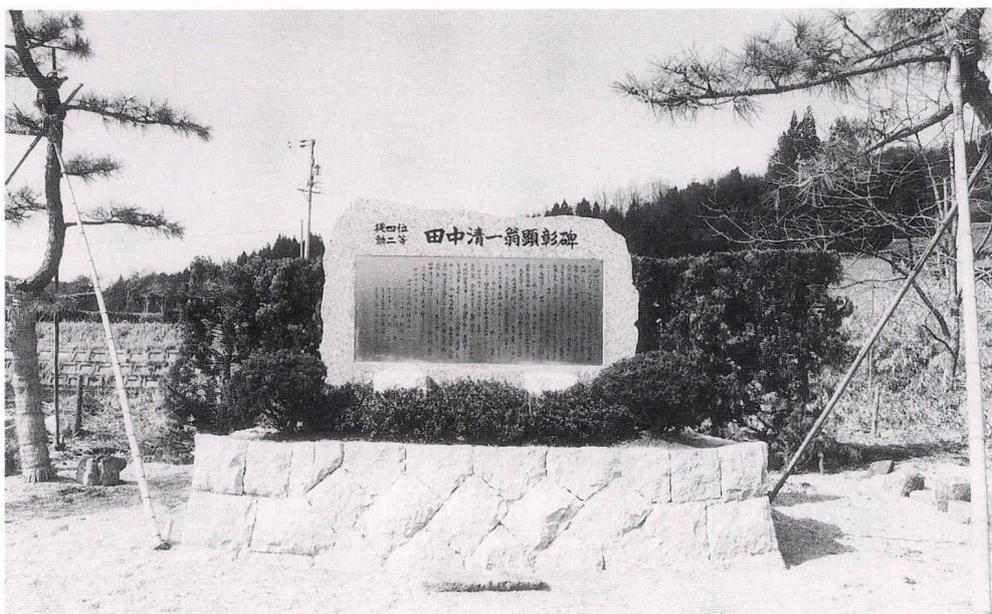
76

77

98

98

〔岐阜県東濃地区の顕彰碑〕



(建立場所) 中央自動車道神坂パーキングエリア付近

従四位  
勲二等

田中清一翁顕彰碑 (碑文)

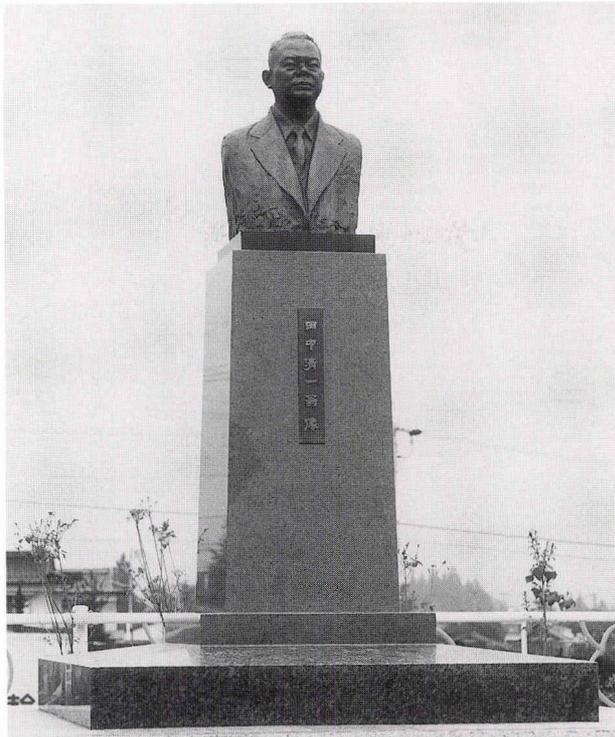
田中清一翁は終戦直後の国土荒廃と人心の動揺のなかにあって一人日本の将来に思いを馳せ「平和国家建設国土計画大綱」と題したいわゆる田中プランを作成し昭和二十二年三月政府に献策された。田中プランの本旨は食糧など資源の開発と人口の分散による国土の均衡ある発展を図るためには国土全域にわたる高速自動車道の建設が基本的条件であり、なかんづく東京と大阪を拡大内陸部で接続する「中央道」こそ緊急に着手すべきであるとしたもので、当時としては誠に氣宇壮大かつ時代を先取りする卓越した大構想であった。田中プランは奇想とも言われ世人を驚倒せしめたものであったが故に実現への道程は極めて困難であった。すなわち連合国軍総司令部(G・H・Q)の支持を得つつ、二十四年十月には天皇陛下への御説明を始め全国各地での講演さらには私財を投げ打っての現地調査研究に努められたが容易に進展せず三十四年からは参議院議員として中央道早期建設に挺身されるなどその不撓不屈の精神は余人の及ぶところではないといえよう。このような翁の誠意と計画の偉大さがしだいに認められた結果三十二年に「国土開発縦貫自動車道建設法」が制定されたのちついに四十一年七月中央自動車道として着手され五十年八月に県内区間が、五十七年十一月には全線が開通しさらに六十年三月破碎断層地帯として最も困難を極めた恵那山トンネル第二期工事が完成したことによって翁発願の夢は見事に実現したのである。今中央自動車道は当中津川市を全国各地に結ぶ高速道路ネットワークとして我が国の隆盛に大きな役割を果しているがここに至らしめた生みの親とも言うべき田中清一翁の功績をたたえるためここに顕彰碑を建立しその偉大なる事蹟を後世に伝えるものである。

昭和六十年三月吉日

田中清一翁顕彰碑発起人

岐阜県知事 上松陽助  
岐阜県議会議長 木村建  
中津川市議会議長 小池保  
中津川市議会議長 伊藤永  
中津川商工会議所会頭 丸山敏治

〔長野県飯田地区の顕彰碑〕



(建立場所) 中央自動車道飯田インターチェンジ付近

従四位  
勲二等

田中清一翁顕彰碑（碑文）

田中清一翁は終戦直後、日本の将来に思いを馳せ、「平和国家建設国土計画大綱」と題した田中プランを作成し昭和二十二年三月政府に献策された。この大綱の本旨は、国土の均衡ある発展を図るには国内全域に亘る高速自動車道の建設が基本であり特に東京大阪を内陸部で接続する「中央道」こそ緊要であるとし昭和二十四年十月天皇陛下へのご説明をはじめ各地での講演、私財を投じての現地調査につとめた。三十二年に「国土開発縦貫自動車道建設法」が制定され、三十四年翁は参議院議員として中央自動車道早期実現に粉骨碎身され遂に四十一年七月中央道建設着工、恵那山トンネルの難関を突破して伊那谷に進み五十年八月駒ヶ根インターまで供用開始、五十七年十一月、東京まで全線開通となった。陸の孤島といわれた飯田市及び伊那谷に待望の黎明がもたらされ地域振興に果す役割は計り知れないものがあり当地は歓喜の声に湧きこの自動車道の生みの親ともいべき田中清一翁に深甚の謝意と敬意を捧げた。ここに田中清一翁の偉大な功績を称え永く後世に伝えんがため顕彰碑を建立するものである。

昭和六十三年十月吉日

発起人

飯田市  
飯田郡町村会  
飯田商工会議所  
飯田中央農業協同組合  
下伊那商工連合会

# 「平和国家建設国土計画大綱」

これは昭和二十年八月十五日、終戦の大詔が発せられたが、当時は戦災で全国各地の都市・住宅・建造物や交通網が破壊され、特に深刻な「食糧の不足」で社会は極度に混乱し、人心は不安動揺していた終戦の直後から、田中清一氏は狭くなった国土を立体的に使用し、新都市・新農村及び新工場団地を造成し、更に全国の道路網を近代化し、この沿線の資源開発を行い、特に「食糧の自給自足」を重点に、画期的な諸施策を企画し、二度と悲惨な戦争を起こさないように「平和国家建設国土計画大綱」を下図の如く一卷にして、左記に提出しました。

## 一、日本政府

(昭和二十二年四月)

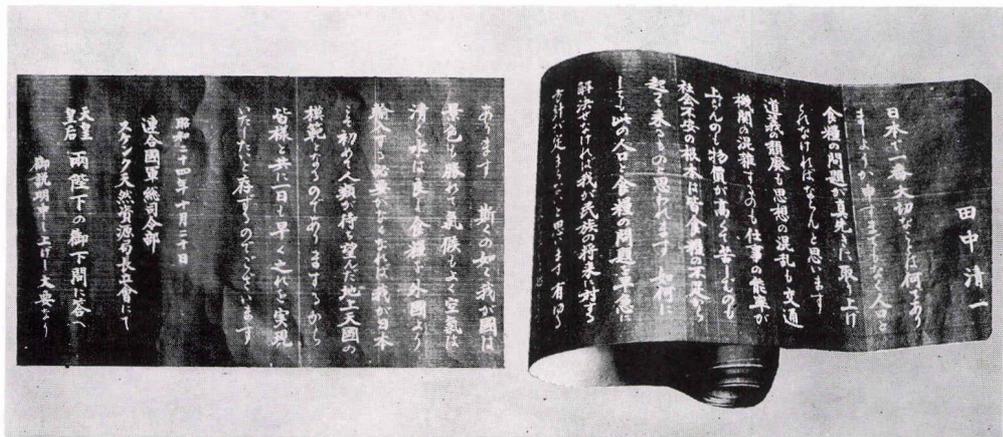
## 一、連合国軍総司令官

マッカーサー元師閣下

(昭和二十二年四月)

## 一、天皇両陛下に御説明

(昭和二十四年十月二十日)  
「三越会場」にて



平和国家建設国土計画大綱

## 「平和国家建設国土計画大綱」の実現について

この原本の一部は、本誌の巻末に掲載してありますので、各位のご参照をお願い致します。また、内容が多項目にわたりますので、ここでは特に、「道路建設に関する問題」を抜粋して記述致します。尚、この「田中プラン」が実現するに至った各種の状況と推進経過を、下記に「順を追って」掲載しましたので、ご賢察をお願い致します。

### 1 「新日本建設」の国土計画について

本章の冒頭（右頁）に記述のように、田中翁は終戦直後から、日本の再建は狭くなった国土を「立体的」に使用することから始まると主張された。そのためには次項のように全国の道路網を「高速近代化」し、併せて道路の沿線をも開発しながら、「新都市、新農耕地、新工業地帯」を造成し、諸資源（森林、地下鉱物、水力資源）を開発し、眠れる未利用資源の活用で新産業を誘発するとともに、道路交通のスピードアップによる、物資の輸送迅速化と、都鄙の文化の交流によって「文化生活」の向上を図るなど、文字通り「新日本建設」を図る理想案が企画された。

### 2 全国道路網の近代化建設

「全国道路網の近代化」とは、日本列島の「北は北海道の稚内（ワツカナイ）から南は鹿児島」に至るまで、国土の中部を「背骨型」に縦貫する「高速道路」を建設し、これを基幹道路とする。更に、太平洋岸と日本海の重要地帯に至る道路を「肋骨型」に結んで建設して、「全国道路網の近代化」をめざした企画である。

### 3 日本国土の「立体模型」を製作

当時の日本政府は最初「田中案」を内務省で担当されたが、大規模な国土改造となるため連合軍総司令部（G・H・Q）

から注目され、天然資源局の担当に替わった局長のスケンク大佐や総司令官のマッカーサー元帥らが検討された結果、大きく評価された。元帥は、田中企画者を招き詳しく説明を求め、日本再建のマスタープランとして爾後、「田中プラン」と命名され、更にこれを国民が一目で理解出来るように、日本国土の「立体模型」を作るように要望された。

このため田中翁は、当時の参謀本部で作られた日本国土の五万分の一の地図や、G・H・Qで撮られた航空写真を基に、二か年余を費やして日本全土の「立体模型（二十万分の一、石膏製）」を昭和二十三年八月に完成してG・H・Qに搬入された。

#### 4 「国土計画展覧会」を開催（G・H・Q主催）

連合国軍総司令部では、前記の「日本国土立体模型」が完成すると、これを中心に、日本再建に関する各種の資料と共に「国土計画展覧会」を左記のように開催された。

##### \*連合国軍参観

一、東京・日比谷アーニーパイル会場

十四日間（昭和二十四年九月二十八日～十月十一日）

##### \*日本国民参観

一、東京・日本橋三越会場大ホール

九日間（昭和二十四年十月十二日～十月二十日）

#### 5 天皇・皇后両陛下にご説明（昭和24年10月20日）

三越会場においては、十月二十日、G・H・Qの天然資源局長スケンク大佐のご案内で「天皇・皇后両陛下」がご観覧になり、田中企画者が長時間にわたってご説明申し上げ、陛下から「理想的な国土計画の実現を期待する」との激励の言葉を賜り、田中企画者は愈々畢生の事業として、日本再建の国土計画を実現させることを決意された。

#### 6 内外政財界の関心高まる

(1) 米政府特使ダレス氏と会見（24年4月22日）

日米協会（会長小松隆氏）主催のダレス氏来日歓迎会において、田中企画者は「平和国家建設国土計画大綱」の英文版と各種の資料で田中プランを説明し、文献を呈上して米国側の協力と支援を求められた。

(2) 米大統領特使ドツヂ氏と会見（24年10月）

総理大臣吉田茂氏の紹介で、田中企画者は中島久万吉元商工大臣と共に日米協会で、米国特使のドツヂ氏に国土計画田中プランの資料を提出して、米側の支援と協力を求めた。

(3) 内閣総理大臣吉田茂氏の協力（24年10月19日）

前記の「国土計画展覧会」で「天皇・皇后両陛下」がご高

覧の前日に、吉田総理がご来場になり、出品中の「国土立体模型」や、関連の各資料を詳しく観覧されて、田中プランに関する認識を深められ、支援を高められた。

(4) 東京大学における講演会（24年10月24日）

国土開発に関心を寄せていた学部では、三越展覧会での国土計画田中プランに注目され、同二十四日に東大講堂で講演会を開催し、学部の先生や学生たちと熱心な質疑が行われた。講演後は精密工学科（工博）大越諄先生を中心に土木工学科（工博）田中豊氏、油工学科（理博）上床国夫氏、第一工学科部長（工博）大山松次郎氏ら工学部の十余名の先生が上野精養軒に集合されて田中企画者を囲んで活発な論議が行われ、「田中会」の結成の提案もされた。

(5) 経済安定本部一行の来訪（24年10月25日）

吉田総理のご指示か、前記「国土計画展覧会」が終了後に政府部内の経済安定本部から長官青木孝義氏が随員と共に田中企画者の経営する(株)富士製作所（沼津市）に来社し、各種の田中プランの資料で長時間懇談された。

(6) 日本工業倶楽部にて講演（24年11月30日）

東京丸ノ内に所在する工業クラブは、政界の議事堂に対応する如き有名な殿堂である。

この大御所、中島久万吉氏（元商工大臣）が中心となられて財界の有力者を集め「国土計画田中プラン」の講演会を開

催された。

(7) 皇宮警察本部における講演（25年4月25日）

昨年十月、三越会場で「両陛下」に田中プランをご高覧賜って後、ご警護の警察本部が田中企画者の講演を求め、本部長樺山俊夫氏ら関係者一同が集合された。

沼津御用邸

沼津市には歴史的な御用邸が所在するので、同年七月に樺山本部長が来沼された時、富士製作所に田中企画者を訪ねられ、爾来歴代の本部長もご来邸の折には来社されている。

皇宮警察桐栄会

以上のご縁で田中清一氏は由緒ある「桐栄会」に推選され、更に常任理事に推挙され「皇居の自由出入り」の資格者になられ、尚後記の「国土建設一円会」には皇宮警察関係一同が加入されて高成績を挙げるに至った。

(8) 元満州重工業総裁鮎川氏の来訪（25年6月）

日本産業界の重鎮、鮎川義介氏は経済安定本部の事務官岡本、山田、近藤氏と東京読売新聞社の記者一行と共に来訪され、田中企画者と長時間話し合わせ、鮎川氏は満州開拓の経過を語られて田中プランの実現に激励と、協力を約束し帰京された。

(9) 建設大臣野田卯一氏の来訪（26年10月17日）

政府では経済安定本部に次いで建設省の大臣野田卯一氏が

来訪され、田中企画者と「田中プラン」について懇談された。

## 7 政財界の有力者、沼津訪問（昭和26年度の特掲）

前記の如く昭和二十四年度には、米国特使ダレス氏が四月に、米国大統領特使ドツヂ氏は十月に来日され、G・H・Q主催の「国土計画展覧会」の会場に、「天皇・皇后両陛下」をご案内され、田中企画者がご説明を申し上げ、「お言葉を賜る」などで、日本政財界の有力者も矚目し、沼津市の田中企画者を訪問されるようになった。主なる訪客は左記の通り。

（敬称略）	
○ 石原広一郎	石原産業(株)会長 (2月24日)
○ 樺山 俊夫	皇宮警察本部長 (3月23日)
○ 坊城 俊良	皇后宮大夫 (3月23日)
○ 小松 隆	日米協会会長 (4月2日)
○ 中島久万吉	元・商工大臣 (4月9日)
○ 林 甚之丞	日本鋼管(株)社長 (5月27日)
○ 八田 嘉明	元・鉄道大臣 (7月14日)
○ 木下 道雄	元・侍従次長 (9月16日)
○ 尾崎 行輝	参議院議員 (11月15日)

## 8 米国・ロックフェラー三世と会談（昭和27年4月）

米国財界の重鎮ロックフェラー三世は、戦後の日本経済の視察と他の要務で昭和二十二年八月と二十七年四月、二回も来日され、二十七年に田中企画者と会談され、前記のダレス氏やドツヂ氏と同様に田中企画者から米側の協力を求められた。

## 9 報道陣の「田中プラン」批評（企画発表以来）

終戦後の国状は、社会が極度に混乱し、諸産業は萎縮衰退、国力は疲弊し、特に、食糧が不足して周章狼狽、人心は不安動揺の時代に、突如として「食糧の自給自足」を説き、日本全土を大改造する「総合国土計画案」を民間人（田中清一氏）から政府当局に提出したので、当時の新聞報道界では「奇想天外」とか「誇大妄想」や「狂人の夢」などの見出しで、何れも「奇人扱い」にされた。

## 10 「田中プラン」実現の国民運動

然るに前記の「天皇陛下」へのご説明や、G・H・Q側の支援・政府当局筋の関心の深まりなどや、田中企画者の各地での講演行脚で新日本建設の構想が理解され、「田中プラン

実現」の要望が「国民運動」に進展した。

## 11 「国土建設推進連盟」を結成（昭和28年2月）

昭和二十年八月、終戦以来叫び続けた「再建日本」の田中プランは、既述の如く全国各地で実現運動となり、次の如く連盟の結成の声明が発せられるようになった。

### 連盟結成の趣意書

『「戦争か平和か」誰も言うことばである。戦争が好きだという人はない、誰も平和が好きであることは論を俟たない。然るに戦争を敢えてする所以は、その国の存亡が、平和的方法では解決できなくなるからである。戦いに敗れた日本は膨大なる人口を抱え、更に年々百万人の増加に対して、今後はどうして、生活して行くかが問題である。貿易も大切であるが、これに全部を頼ることは出来ない。移民も必要であるが、多く期待をかけることは不可能である。かくて世界経済の波一つが、忽ち国民生活を危殆ならしめる』  
（以下省略）

### (1) 全国各地の有志集合結成す

昭和二十八年二月十一日（往年の紀元節）沼津市に全国各地の有志が集合、田中プランの実現を期して結成された。

（注）長野県飯田商工会議所・専務理事坂下広士氏、外二十数名の有志が、毎回の沼津会合に出席されていたことは特筆される。

### (2) 国土建設推進連盟の役員（敬称略）

名誉総裁	理事	顧問	各地責任者
東久邇稔彦	池田篤紀	中島久万吉	松永 五一
市川良成	小西 百一	八田 嘉明	東京本部
青木 久弥	小西 百一	高木 陸郎	小西 百一
平沢久次郎	大阪本部	木下 道雄	団野 雅章
望月 直	愛知県本部	安井 英二	静岡県本部
村岡 喜六	中田 録郎	青木 一男	中田 録郎
静岡県本部	中田 録郎	古野伊之助	山梨県本部
堀内 一雄	鈴木 文雄	中村 元督	長野県本部
長野県本部	鈴木 与平	長野 朗	青島 愛二
白井 最	柴山 重一	会長	
栗林 藤蔵	（敬称略）	田中 清一	
松田 江畔		理事長	
国持 史郎		片平七太郎	

(3) 推進連盟の機関誌「新国土」を発売

◎月刊誌「新国土」の創刊号は昭和二十八年七月に発売

これは「新日本建設」を推進するため、全国各地の有志と推進本部を連結し、情報を交流する目的である。

この編集長は「松田江畔氏」（清水市）で熱心な本部員で「八月号」には、近衛文麿公と田中清一氏の対談があり、田中プランの推進状況、国会討論、世界状況などを記録した貴重な文献となり、累巻百五十号まで達し、現在田中研究所に保存されている。

昭和四十年以降は、一般紙で情報伝達がされるようになった。

## 12 「国土開発中央道」の建設案（B図を参照）

新日本建設の「平和国家国土計画大綱」は、全国道路網を（前掲の15頁の如く）「高速近代化」する案から企画されたが、終戦後の国情としては、まず「第一期事業」として「東京―神戸間」を急ぎ建設する案を促進することになり、この利点が左記の如く指摘された。

### 中央道の主な利点

- 一、農耕地を潰さない（食糧問題の重要性を考慮して）
- 二、人家の移動が少ない（移転補償、用地買収の手間を考慮して）

- 三、橋梁資材の節約（上流は東海道案より幅員が狭い）
- 四、新設の道路沿線の開発（新住宅地、新農耕地の造成）
- 五、資源開発や産業の誘発（奥地森林、地下鉱物、水力資源）
- 六、人口分有に貢献する（過大都市、過疎地に恩恵）

（その他、多項目を省略）

## 13 「中央道建設」の「請願書」を国会に提出

（昭和27年3月17日）

### 一、建設を必要とする理由

（長文につき省略する）

### 二、道路建設にて請願する目標

- 一、「東京―神戸間・高速自動車道路」は東京を起点として山梨―長野―岐阜の各県南部を横断する「中央路線」とし、我が国再建の「平和記念事業」として緊急に着工し、最短距離四五〇キロの自動車道を最短期間（五ヶ年以内）に完成を期することを要望する。
- 二、「東京―神戸間・高速自動車道路」の建設は「国直轄事業」とし、建設後は一定期間（約十五年間）は特殊会社の経営により建設費（三分の一以上）の償還を期することを要望する。

◎これは「請願方式」で衆議院・参議院に提出した。

(東京～神戸間)  
 「中央高速自動車道」(建設計画図)  
 (B図)



「請願書」に添付した「説明書」

- 一、建設を必要とする理由
- 一、幹線道路の整理について
  - 二、自動車の運行時速について
  - 三、将来の自動車の増加傾向について
  - 四、自動車専用道路の許容交通量について
  - 五、東京―神戸間の高速自動車道路の交通量について
- 二、建設事業計画の概要
- 一、計画道路の経過地について
  - 二、計画道路の設計について
  - 三、財政計画について
- 静岡県沼津市日之出町四〇一番地  
 (代表請願者) 田中清一(印)

請願書に連署の署名人(敬称略・順不同)

中島久万吉	元商工大臣	友森 二郎	(株)富士製作所 役員
八田 嘉明	元鉄道大臣	瀬上 清高	(株)富士製作所 役員
宇垣 一成	元陸軍大将	小西 百一	総合国土計画 研究所常任理 事
林 甚之丞	日本網管社長	平沢久次郎	田中会長秘書 (以下省略)
石原広一郎	石原産業会長		
小松 隆	日米協会会長		
三浦鉄太郎	大日本山林会 会長		
中村 元督	日本工業倶楽 部常任理事		

(国会請願方式で連署人も住所番地を記入し、捺印した)

## 14 「国土開発中央道」の推進状況

(1) 前年提出の「国会請願書」について（28年5月27日）

建設省 戸塚九一郎氏  
運輸省 石井光次郎氏  
の所管大臣と田中企画者との会談

(2) 政府首脳者と会談（28年9月9日）

副総理 緒方 竹虎氏  
建設大臣 戸塚九一郎氏  
運輸大臣 石井光次郎氏  
と田中企画者

（顧問） 中島久万吉

八田 嘉明 （事務局） 瀬上 清高

青木 一男 小西 百一

吉野伊之助

（場所） 朝日会館アラスカにて

## 15 建設省内に「中央道調査審議会」設置

（昭和29年4月）

昭和二十七年三月に「中央道建設」の「国会請願書」を提出した熱意や、前記の如き、各地各機関での論議や、特に中央道の沿線、各県の陳情で、政府は建設省内に左記のような調査審議会を設置するに至った。

### ◎ 「国土開発中央道調査審議会」の構成（29年4月）

△会長 建設大臣 小沢佐重喜	△通商産業事務次官 平井富三郎
（関連省庁） △経済審議庁次官 長村 貞一	△運輸事務次官 牛島 辰弥
△大蔵事務次官 河野 一之	△建設政務次官 南 政雄
△農林事務次官 東畑 四郎	△建設事務次官 稲浦 鹿蔵
	△建設技官 菊地 明

### ◎ （学識経験者）

△田中 清一	綜合国土計画研究所(株)富士製作所会長
△八田 嘉明	元鉄道大臣
△高木 陸郎	国土開発(株)会長
△木村 公平	吉田内閣総理大臣首席秘書
△平山復二郎	ピーエスコンクリート(株)社長
△宇野権八郎	建設省専門委員 東京大学教授
△新井善太郎	建設省専門委員
△藤井 貞秀	建設省専門委員
△金子源一郎	三菱地所(株)取締役
△牧野雅楽之丞	特殊士、対策審議会委員
△近藤謙三郎	全国道路利用者会議事務局長

## 「国土開発中央道調査審議会」の経過

- 一、この審議会は二十九年六月より九月までに八回開催された。
- 一、第五回には「中央道案」か「東海道案」で大激論となつた詳細が議事録で記録されている。
- 一、建設大臣は「中央道案」は「技術的に可能なり」と決審された。

### (備考)

- △この詳細な議事録は勸田中研究所で保存中である。
- △この「中央道建設案」から、後記の全国建設法となり「国土開発縦貫自動車道建設法案」の基本となった。

## 16 官庁技術者と懇談会 (昭和28年10月28日)

- 一、主催、日本科学技術連盟 (会長 元鉄道大臣八田嘉明氏)
- 一、場所、同連盟の会議室 (東京都・大阪商船ビル内)
- 一、議題、「総合国土計画」を田中企画者から聴く

### (出席者)

- △総理府資源調査会 小島 鎮雄 前島 芳一
- △建設省審議室 塩原 三郎 (同計画局) 奥村 和夫
- △運輸省鉄道監督局 印南 卓一 (同港湾局) 大久保嘉一
- △運輸省建設課 長尾 義三
- △農林省水産庁 亘理 信一

## 17 「国土総合開発調査会」の来沼 (昭和29年1月13日)

- △農林省官房総合開発課 中谷 忠治 屋宜宜二郎
- △農林省経済局 中川 光 (改良局) 田所 萌
- △農林省研究第二課 曾根 徹
- △通産省重工業局 安原 武彦
- △通産省工業品検査所 原 善太郎 佐々木俊哲
- ◎この懇談会は、昨年三月に衆参両院に提出した「中央道建設の請願書」に関係する各省の技術官が、田中企画者と詳細な質疑と討議するために開催されたのであろう。

東京朝日新聞社は昭和二十九年正月四日付にて「日本の生きる道」と題して社説を掲載したが、左記の論説委員一行が田中企画者の(株)富士製作所を訪問し、会議室で「国土計画田中プラン」についての調査や質疑を行った。

△田中慎太郎 東京朝日新聞社

### 「国土総合開発調査会」常任理事

- △園田 次郎 朝日新聞論説委員 (同右の理事)
- △笠 信太郎 朝日新聞論説主幹
- △団野 信夫 同右、論説委員
- △塩原 三郎 建設省道路局、技官

## 日本の生きる道

昭和29年1月4日  
朝日新聞・社説

国土がせまく、資源がすくなく、人口が多い。これが日本の真の姿である。このことは、年の始めによくかみしめてみる必要がある。

国土の大きさは、これはどう工夫してもかえることはできない。北海道、本州、四国、九州という四つの島に生きるということは、日本に課せられた最も厳粛な条件である。同時にこの四つの島に生きるとは、われわれの誇りでもある。

国土の大きさを、海を越えて横にひろげることができないが、いわばこれを縦に深めることはできる。せまい国土の完全な利用、資源の開発がこれにあたるだろう。日本には、まだいろいろの意味で、未利用の土地があり、未開発の資源がある。いずれはそれらも、開発しつくされるであろうが、まだまだその余地はある。

(以下省略)

## 18 関西財界の有力者と懇談 (昭和28年8月10日)

大阪商工会議所の主催、場所は会館の大ホール。先ず会頭の杉道助氏が開催の主旨を、「国土開発中央道期成会」の会

長、中島久吉氏と顧問の安井英二氏が田中プラン支援の挨拶を行った後、田中企画者の講演が行われた。

### (主なる出席者)

杉 道助	大原総一郎	(倉敷レーヨン)
中野種一郎	武藤 絲治	(鐘淵紡績)
宮崎彦次郎	関 桂三	(東洋紡績)
堀田 正三	井上 富三	(呉羽紡績)
岡崎 忠	大田垣四郎	(関西電力)
熊谷栄次郎	小原 英一	(関西電鉄)
伊藤 銀三	村岡 四郎	(京阪電鉄)
児山破魔吉	真弓 徹	(伊藤忠商事)
神山喜久雄	天野 毅彦	(京阪神急行)
西山弥太郎	鴻池 藤一	(鴻池組)
松原与三松	竹中 雄之	(竹中組)
山岡 孫吉	大林 芳郎	(大林組)
竹崎 瑞夫	錢高 輝之	(錢高組)
鈴木 庸輔	砂田 純一	(近畿日本鉄道)

(以下省略)

19 関西における「政財界大会」(昭和29年6月29日)

前年は既掲の如く「大阪商工会議所」の主催で開催されたが、この年は「経団連」の中核体である「総合経済政策委員会」(委員長、大原総一郎氏)の主催で開催された。

- 一、場所 大阪・清交社(堂ビルの九階) 大ホールにて  
一、議題

△「国土開発中央道」について(田中企画者より聴く)  
△関西経済連合会(会長、関桂三氏)から「首相、建設相、衆議院建設委員長、同経済安定委員長、その他に「中央道建設要望書」を提出する件

- 一、参加者 「関経連」の各界より二百数十名  
一、決議 「中央道建設」は万場一致で協賛された。早速要望書の作成が行われ、会長・関桂三氏から首相、建設相、衆議院建設委員長、同経済安定委員長その他に九月十四日付で提出された。

(備考)

この会場には「幅二m×長さ一〇m」の中央道路線が一目でわかる大パノラマ絵を掲げ、田中企画者の熱弁や、多数の質疑応答で、拍手喝采が起こった。関西財界の各界から主脳者が多数集合したことは、珍しいと報道界も特報した。

20 関東における「政財界大会」(昭和29年6月24日)

- 一、主催 日本工業倶楽部(東京・丸ノ内)  
一、会場 同館・三階大会議室にて  
一、議題 国土計画田中プラン(田中企画者の講演)

永野 重雄	富士製鉄社長	正田英三郎	日清製粉社長
山際 正道	日本銀行総裁	小松 隆	日本協会会長
大倉喜七郎	大倉文化財団理事長	郷古 潔	日経連顧問
佐藤喜一郎	三井銀行社長	中島久万吉	元商工大臣
倉田 主税	日立製作所会長	犬丸 徹三	帝国ホテル社長
安川第五郎	安川重機会長	高木 陸郎	日本国土開発会長
山下 太郎	山下汽船社長	中村 元督	日本工業倶楽部常任理事
石井太郎吉	石井産業社長	野田 正一	碌々産業(株)社長
宮島清次郎	日本工業倶楽部理事	尾崎 行輝	参議院議員
金光 庸夫	静神相互銀行会長	山根 銀一	日本工業倶楽部主事
阿部 登樹	東光電気(株)社長	伊藤 武男	東洋生糸(株)社長
相羽 有	東京航空(株)社長	上野福三郎	日硝商事(株)
天野貞之助	大倉商事(株)	江上 正夫	内藤工業(株)技師長
五十嵐秀二	藤倉電線顧問	大倉 邦彦	特殊製紙(株)会長

参加者 政財界の各層より四百五十余名(以下省略)

◎ 関東大会の状況

当時開催中であった「国土開発中央道調査審議会」の状況や「衆議院建設委員会」と「衆議院経済安定委員会」で、継続審議中の状況を大々的に報道されていたのが前人気となつて会場へ続々と参集され、大盛況となった。

会場内には、天皇陛下が、ご高覧の「日本国土立体模型」及び中央道の、長さ一〇mの「大パノラマ図絵」や各資料が展示された。

21 昭和二十四年の関東大会

既掲の「国土計画展覧会」の三越会場で、「天皇・皇后両陛下」に田中企画者をご説明申し上げてから斯界の注目を受け、「日本工業倶楽部」では同年の十一月三十日に政財界の有志多数が集合されて、田中企画者の講演会を開催し、爾来、有力者が沼津に来訪され、田中プランの協力者が漸増した状況は、既に記述した通りである。

この大会には衆議院で討議中の模様が報道され、注目された。

22 衆議院建設委員会の議事録の抜粋

◎ 開会……昭和29年3月11日、午前11時3分  
(出席委員)

委員長	久野 忠治	委員	逢沢 寛
理事	内海 安吉	岡村利右工門	
田中 角栄	仲川房次郎		
志村 藏治	赤沢 正道		
瀬戸山三男	三鍋 義三		
佐藤虎次郎	杉崎 朝治		
細野三千雄	村瀬 宣親		
	山下 栄二		
(政府委員) ……建設技官、道路局長、	富樫 凱一		
(委員外の出席者) 建設事務次官、	稲浦 鹿蔵		
(参考人) ……綜合国土計画研究所長、	田中 清一		
(専門員)	西畑 正倫、田中 義一(以上、敬称略)		

議事録の要点の抜粋

久野委員長……本日は前回の委員会において決定した本州を縦断する高速道路について参考人の田中清一君より、その構想について説明、並びに意見を聴取することになります。

田中さんに一言御挨拶とお礼を申し上げます。参考人田中清一君には、御多用中を当委員会へ御出席いただきましたことを委員会を代表して厚く御礼を申し上げます。

久野委員長……道路問題に関する委員会は、先般ガソリン税収入を道路費に充てるという画期的な法案が整備され、産業開発のため、まず産業道路の整備改良に、重点を注いで予算上の措置が着々と講ぜられているが、限られた予算の、範囲内において整備を遂行することは困難である（中略）……

かかる際に田中さんの高邁な、しかも長年月に亘っての御調査の高速道路の件についてお話を伺うことは、私たちとしては非常に喜びに堪えない。時間の許す限り、ひとつ御意見を承りたいと存ずる次第である。

なお、当委員会としても質疑その他を通じて、田中さんの御意見を十分尽して貰いたい。

田中参考人……本日は、この権威ある国会の建設委員会の方々が、私のような素人の考えた道について、ディスカッションをするという機会をつくって頂いたことは光栄であります。これまでに運んで頂いた御列席の皆様に対し厚く御礼申し上げます。（との挨拶の後に「新日本建設のための国土計画、田中プラン」の詳細について、約一時間ほど説明を行ったが以下省略。尚、この状況は前掲の「関東大会」の案内状にも記載、紹介された。）

## 23 「綜合国土計画研究所」について（創立昭和12年）

昭和六年（西紀一九三一年）満州事変の勃発より、戦雲が日増しに険悪化し、遂に十二年「日支事変」に拡大した年「戦争の起因と世界平和」を研究し、対処するために、民間人の田中清一氏が「綜合国土計画研究所」と名称し、官民有志の協力で設立された研究所である。

当初は「戦争は人口と食糧の不均衡（アンバランス）」から起ると論断され「農耕地の確保と食糧の自給自足」に対応する研究を行い、軍需産業でも農耕地を潰さないよう、軍部には「地下工場」を献策したので、陸海軍の要人が、沼津に田中企画者を訪ねられる状況となった。

（注）前掲の衆議院建設委員会へは、右の「研究所長」として出席した。

## 24 「財団法人、田中研究所」に改組

右記の「綜合国土計画研究所」の使命向上化に伴い、更に公的な活動ができるように（次頁掲載の名士の方々と）協議され「財団法人」に改組し「田中研究所」と改称された。

(創立時の役員) (敬称略 順不同)

(理事長)	田中 清一	(理事)	尾崎 行輝	(理事)	木村 公平	吉田首相首席秘書官
(理事)	中島久万吉	元商工大臣	下中弥三郎	元参議院議員	中村 元督	日本工業俱樂部常任理事
	八田 嘉明	元鉄道大臣	友森 二郎	(株)平風社社長	山根 清春	同 右
	高木 陸郎	(株)日本国土開発社長	瀨上 清高	(株)富士製作所役員	小西 百一	同 右
	安井 英二	元文部・内務大臣			元侍従次長	同 右
	青木 一男	元大蔵大臣			元運輸大臣	同 右
	木下 道雄	元大蔵大臣			元三井鉱山(株)社長	同 右
	古野伊之助	元同盟通信社社長			元運輸大臣	同 右
	三井 高修	元三井鉱山(株)社長			平沢久次郎	同 右
	宮沢 胤勇	元運輸大臣			元田中清一氏秘書	同 右

25 田中研究所の顧問会 (昭和32年3月26日)

一、場所 東京会館三階(丸ノ内) 正午より

一、議題 「国土建設縦貫自動車道建設法案」の件

(出席者) (敬称略) (顧問は増加して行った)

- △顧問 大野 伴睦 (前衆議院議長)
  - △ " 清瀬 一郎 (前文部大臣)
  - △ " 下村 海南 (元国務大臣)
  - △ " 三浦伊八郎 (日本山林会会長)
  - △ " 藤山愛一郎 (日本商工会議所会頭)
  - △ " 杉 道助 (大阪商工会議所会頭)
  - △ " 神野金之助 (名古屋商工会議所会頭)
- 顧問、石井光次郎氏は委員会で、広川広禪氏は新潟へ、郷古潔、松方三郎氏は所用のため欠席された。

◎田中理事長の挨拶

「皆々様に於かれましては国会開催中で特に御繁忙の折柄、御出席下さったことを深謝します。」と挨拶し、下記の如く懇談が行われた。

- 一、「国土開発縦貫自動車道建設法案」が近く国会で成立する段階になったことの御支援を謝して、本法案成立後の対策について懇談。

- 二、上記建設法による「建設審議会」の委員として当研究所の理事長・田中清一氏を推薦する件。

- 三、顧問、日蓮宗総本山、身延山久遠寺法主深見日円師の御他界の報告。

以上の外、各顧問との間で時局問題などの懇談も行われ、

会場に掲げられた田中。プランの設計図に対し、清瀬顧問から熱心な質問などがあり、午後二時半に閉会となった。

## 26 「中央道建設」の各県大運動

### (山梨県)

△県会議事堂における大講演会

天野知事が開催の挨拶で田中企画者を紹介し、「中央道の開通で山梨県は東京の玄関と、輿座敷となって画期的な大変革を来たす。」と熱弁された。  
(27年4月28日)

△日蓮宗総本山身延山久遠寺の所在する山梨県身延町では、幾百万の信徒が交通する道造りのためと、強力なる建設大運動が行われた。  
(27年6月16日)

### (長野県)

△飯田市商工会議所において「中央道建設長野地区推進大会」が大規模に開催され「恵那山トンネル」の貫通を目指して関係町村の代表が陳情書を作成し、政府に提出された。  
(27年11月6日)

### (岐阜県)

△岐阜県多治見市において東濃地区の中津川市・多治見市、町・村長全員が集合、岐阜県会議長松野幸泰氏中心に陳情書を作成し、郡上郡連盟共に政府に提出された。(29年3月2日)

(備考) 各県、各会場共「幅二m×長さ一〇mの中央道大パノラマ絵図」や「インターチェンジ」の設計図を掲示し、田中企画者が大熱弁をされ、満堂の拍手を受けた。

### △山梨・長野・岐阜の三県連合会

三県の知事会議と共に、「中央道実現促進連合会」が結成され積極的に展開された。

## 27 「国土建設一円会」を結成(昭和30年正月)

前記の如く「日本再建」の国土計画案、特に緊急着工すべき、「中央道」の建設について漸次世論が進み、更に建設省内における「国土開発中央道調査審議会」の進行と共に、この建設に必要な資金問題が論議されて来た。

田中企画者は、以前から吉田内閣時代「外資導入」が示唆されたが「借金は子孫に残す」ことになると申されて、多年苦心を重ねられた結果、昭和三十年正月、**国民の「一人・一日・一円宛」**の「国土建設のため、目的貯金の国民運動」を提案され、次頁の計算で具体的な方策を発表された。

これには、日本銀行からも賞賛に来社され、また全国各地でも「〇〇一円貯金」と名付けて流行するようになり、「推進連盟」も協力して組織され、全国的な取り組みで益々盛大になって行った。

◎提案の主旨

今日の「一円」は「あめ玉」一個にも値しないのであるから、これ位の節約が出来ない筈はないと思います。出来る人はタバコの「光」三本の十円でも、又は一箱の三十円でも国家再建の為に節約して、これを貯金にされたなら、結果は自分の貯金となり、又国土開発が出来て子孫のために幸福の道を築くことになります。

国土建設のため 目的貯金の国民運動	
目標	1人・1日・1円宛
(現在の人口を8,500万人と見做す)	
貯蓄額	1日…………… 8,500万円
	10日…………… 8億5,000万円
	1ヶ年……………310億2,500万円
	5ヶ年…………… 1,550億円
貯金先	銀行預金
	郵便貯金
	信用金庫
	農業協同組合……………等
預金者名義	団体名又は個人名義とする
	◎但し通帳に〔国土建設一円会〕と併記して頂きたい

28 「沼津商工会議所会頭」に就任(昭和31年)

「国土計画田中プラン」の企画者、田中清一氏は(株)富士製作所の創立者であり、幾多の発明特許を有する技術者でもあり、(株)富士製作所は機械製品を海外に輸出している有名会社

でもある。企画者は昭和三十一年に地元の商工会議所の会頭に就任し、三十四年の参議院選挙に「全国区」として推挙され、立候補の為会頭を辞任するまで、各地で講演活動を積極的に行った。

一、神戸商工会議所で講演

(昭和31年2月15日)

関西電気鉄道小林社長らの司会で行われた。兵庫県知事、三菱造船、川崎重工業、神戸電鉄、山陽電鉄、外各界より多数参席された。

一、関東地区商工会議所で講演

(6月21日)

日本商工会議所会頭、藤山愛一郎氏を中心に関東地方七十七の商工会議所の会頭、専務理事ら二百五十名が参集し、通産大臣石橋湛山氏、静岡県知事齊藤寿夫氏外、多数出席された。

一、日本商工会議所講演

(7月18日)

第二十一回常議員会で会頭藤山愛一郎氏を中心に、東京商工会議所会頭足立正氏、大阪商工会議所会頭杉道助氏外、全国各地の商工会議所会頭及び専務理事ら多数が参席している会場で、沼津の会頭として「田中プラン」の講演を行った。

一、広島商工会議所で講演

(9月25日)

一、山陰各地の商工会議所で講演(9月)

・松江(26日) ・米子(27日) ・鳥取(28日)

一、全国各地へ講演行脚

・京都 ・岐阜 ・福井 ・新潟 ・長野 ・山梨  
・埼玉 ・茨城 ・青森

の各県に、田中企画者が招かれている。

(備考) 1 昭和三十一年度のみで六十余回の各地講演が記録されている。

2 「国土開発田中プラン」を発表以来の各地講演は、数百回に達している。

29 「国土開発縦貫自動車道建設法案」を作成

(昭和30年)

昭和二十九年、建設省内に「国土開発中央道調査審議会」

が設置され、調査の進展と共に、漸時各政党間にも、国土開発の気運が高まり、左記の如く法案化が進められた。

国土計画、田中プランは「新日本建設」のための日本全土の開発計画にして、各政党において検討された結果、日本の開発ブロックを「北海道、東北、中央、中国、九州、四国」

の六管区に分け、北は北海道の稚内から南は九州の鹿児島までを縦貫する高速自動車道を「基幹線」として建設し、これに太平洋岸と日本海岸の重要都市、重要港湾、重要穀倉地帯を連結する「肋骨道路」を建設する企画で「国土開発縦貫自動車道建設法案」として作成された。

30 衆議院議員四百三十名が署名して  
第二十二国会に提出

上記の「国土開発縦貫自動車道建設法案」には自由、民主、

社会(右)、社会(左)の四党の衆議院議員四百三十名が超党派で署名し、昭和三十年六月二十一日に国会に提出された。

このように超党派で署名の上、国会に法律案が提出されたことは、戦時中の挙国一致体制を除き、戦後においては空前の出来事であった。

31 「国土建設縦貫自動車法案」国会で成立する

(昭和32年)

この建設法案の国会成立の経過は左記の通りである。

1 昭和30年6月21日 第二十二国会に提出される。

2 昭和30年7月20日 田中企画者が参考人として二十日より三日間、国会において企画創案者として説明する。

3 昭和30年7月28日 衆議院本会議において全会一致で可決され、直ちに参議院に送付される。

4 昭和30年7月30日 参議院において会期切迫(安保問題で乱闘国会となった)のため(継続審議)となる。

- 5 昭和31年4月20日 第二十四国会参議院において一部修正可決され、直ちに衆議院に回付となる。
- 6 昭和32年2月27日 衆議院建設委員会において一部修正可決される。
- 7 昭和32年3月5日 衆議院本会議で委員長報告通り可決され、直ちに参議院に回付される。
- 8 昭和32年3月28日 参議院建設委員会にて可決される。
- 9 昭和32年3月29日 参議院本会議で全会一致で可決される。
- 10 昭和32年4月16日 国土開発縦貫自動車道建設法、法律第六十八号にて施行される。

### 32 中央道に関する陳情書提出（昭和32年）

#### 陳情書

##### （理由）

先に公布の「国土開発縦貫自動車道建設法」に予定路線として決定を見たる中央自動車道は、都市間の時間的、距離的制約を除去し、併せて国土の集約的利用、産業、経済、生活文化の格差を是正し、更に過大都市、過疎地帯をも是正し、国民士気の高揚と民生安定を招来するものであって、これが建設は真に国家百年の大計である。よって政府、並びに国会においては、本法制定の精神

に鑑み、国土開発縦貫自動車道建設法の「別表」に示す通りの三県各市町村を主たる経過地とする「中央自動車道建設線」を決定し、速やかにこれが実現を計りたい。右、国土開発縦貫自動車道「中央自動車道」建設促進の山梨、長野、岐阜三県合同県民大会の決議に依り陳情致します。

昭和32年6月6日

山梨県国土開発中央道建設期成同盟会

会長 天野 久

長野県中央道建設期成同盟会

会長 林 虎雄

岐阜県中央道建設期成同盟会

会長 松野 幸泰

国土開発縦貫自動車道建設審議会

会長 岸 信介 殿

外、委員29名宛

### 33 田中清一氏の国会出馬（昭和34年）

#### (1) 昭和三十一年度六月（辞退）

本誌に度々掲載されている如く、田中プラン発表の初期か

### 34 田中清一君を国会議員に推薦する

東久 邇 稔 彦

らこの実現の「国民運動」展開で、既に各所で参議院「全国区」から出馬するように要望されたが、田中プランは「超党派」で、法律化を求むるべきもので、この三十一年度は前期の如く「超党派」で法案が提出されたのだからと申され立候補を辞退された。

#### (2) 昭和三十四年度六月（立候補）

この年は待望の「国土開発縦貫自動車道建設法案」が国会で成立したが、「中央道建設」を一段と推進すべき諸般状況を鑑みて、有志一同が「今回は是非、国会に登院」をと熱望され、当時の自民党副総裁、大野伴睦氏と幹事長福田赴夫両氏の推薦もあり「立候補」を決意された。

#### (3) 参議院（全国区）田中清一（初陣で当選）

田中企画者がこの初陣で「全国区」から当選したのは、新日本建設の「国土計画田中プラン」の実現を期待する全国投票三十五万余票と、予想もなかった左記地域の票による集計結果の当選と判明し感銘された。

北海道礼文島	一四票	新潟県佐渡島	一四七票
同 利尻島	三九票	鹿児島県穂力島	八〇票
東京都三宅島	一二票	同 屋久島	四〇票
同 大島	八〇票	同 大島郡二〇一票	

今度、全国区参議院議員に立候補された田中清一君と私は昭和十八年の一月、当時私は防衛総司令官であったので市ヶ谷の司令部へ私を訪ねてくれて、その時、軍人の考え及ばぬ素晴らしい戦略を建築してくれたのが交際のはじめである。

その時は民間にも素晴らしい男が居たものだづく感心致しました。その後戦局が苛烈になって軍部でそれに気がついた時は、既に時機を失して田中氏の建築を入れず終戦となりました。

そこで終戦後、直ちに内閣組織の本命が私に下りました。

その時は敗戦日本の再建をいかにすべきか、戦後国家の経営をいかにすべきかを考えた時、ほんと胸に浮かんだのが田中清一氏であります。早速一週間位の予定で来て呉れと沼津に使いを出しました。（中略）

あの時は日本中が腰を抜かして、日本の将来は一体どうなるのか、こんな低迷混乱、五里霧中の時に、この田中プランこそ日本の夜明けである、日本の前途に光明見えたり、と直感致しました。（中略）

いかに政治に敏くとも、使命を持たぬ者は何も出来得ない。信実且つ誠そのものである田中清一氏の人柄は、今日まで永年の交際の際に私は能く知悉しています。

この人なればこそ、お国興しの大業完遂に選ばれた一人で、そこに今回立候補するに立ち至った真髓があると信じます。この意味に於いて、何がなんでも田中氏を議政壇上に送り、田中氏の手で「国土開発縦貫自動車道建設」の大業を成就せしむることこそ「新日本の開頭」であると確信するものであります。

（以下略）

## 35 田中清一氏の国会活動

### (1) 参考文献の作成と印刷物提供

- 1 国土開発自動車道全国計画概要資料
- 2 「東京―神戸」高速自動車道路建設計画案説明書
- 3 同右の「英文印刷」の作成と発刊
- 4 日本国土の立体模型（二〇万分の一）製作
- 5 「中央高速自動車道」の俯瞰図（幅一〇m）
- 6 日本的高速自動車道「その発案と実現について」
- 7 「平和国家建設国土計画大綱」の発刊

### (2) 参議院議員六ヶ年間の活動

田中清一氏の六ヶ年間に亘る国会活動は文字通り獅子奮迅の感で筆舌に表し難い。左記委員会活動も同様であった。

- 一、参議院建設委員会（常任委員）
- 一、参議院決算委員会（常任委員）
- 一、自民党道路調査会（副会長）
- 一、道路調査会（副会長）
- 一、自民党政調建設部会（委員）
- 一、自民党国防部会（副会長）
- 一、国土建設縦貫自動車道建設審議会（委員）

### (3) 「国土開発縦貫自動車道建設審議会」の委員として

「新日本建設」の基盤となる「全国道路網」の高速近代化の建設は、昭和三十二年の国会で成立した「標記の建設法」（法律第六十八号）に基づいて着手され、漸次懸案の重要路線の「高速近代化」の建設が進展するに至った。

この立法化に努力された田中清一氏は、昭和三十二年から三十四年までは「学識経験者」として審議会委員に就任、三十四年参議院議員に当選後は国会議員として審議会に出席され、国会で大きな活躍をされた。（この状況は議事録に明記されている）

### (4) 関連する「道路建設法」の成立

- 1 東海道幹線自動車国道建設法
- 2 国土開発幹線自動車道建設法  
（右の建設法は「全国縦貫自動車道建設法」（法律第六十八号）の着工に伴う必要な関連法律で昭和四十一年夏までに成立した）

36 「国土開発縦貫自動車道建設審議会」委員名簿

年次	32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年	41年	会長 内閣総理大臣
	池田 信介	岸 信介	岸 信介	岸 信介	池田 勇人	池田 勇人	池田 勇人	池田 勇人	佐藤 栄作	佐藤 栄作	大蔵大臣
	南条 徳男	根本竜太郎	遠藤 三郎	村上 勇	中村 梅吉	中村 梅吉	河野 一郎	河野 一郎	瀬戸山三男	橋本登美三郎	建設大臣
	宮沢 胤勇	中村三之丞	永野 護	檜橋 渡	齊藤 昇	齊藤 昇	綾部健太郎	綾部健太郎	中村 寅太	荒船清十郎	運輸大臣
	水田三喜男	前尾繁三郎	高碓達之助	池田 勇人	佐藤 栄作	佐藤 栄作	福田 一	福田 一	三木 武夫	三木 武夫	通商産業大臣
	井出一太郎	赤城 宗徳	三浦 一男	福田 赳夫	河野 一郎	河野 一郎	重政 誠之	赤城 宗徳	坂田 栄一	松野 頼三	農林大臣
	田中 清一	田中 清一	田中 清一	田中 清一	田中 清一	田中 清一	田中 清一	田中 清一	田中 清一	(退任)	審議委員
			(学識経験者)								資格
											(国会議員で出席)

(備考) 詳細な「委員名簿」は次に記録する。

◎昭和32年6月、「国土開発縦貫自動車道建設法」が国会で成立すると直ちにこの「審議会」が発足した。

係	各	省		
通商産業大臣	農林大臣	国家公安委員長	自治大臣	経済企画庁長官
水田三喜男	井出一太郎	大久保留次郎	田中伊三次	宇田耕一
前尾繁三郎	赤城宗徳	正力松太郎	郡祐一	河野一郎
高碓達之助	三浦一男	青木正	青木正	世耕弘一
池田勇人	福田赳夫	石原幹市郎	石原幹市郎	菅野和太郎
佐藤栄作	河野一郎	安井謙	安井謙	藤山愛一郎
佐藤栄作	河野一郎	安井謙	安井謙	藤山愛一郎
福田一	重政誠之	篠田弘作	篠田弘作	宮沢喜一
福田一	赤城宗徳	早川崇	早川崇	宮沢喜一
三木武夫	坂田栄一	永山忠則	永山忠則	藤山愛一郎
三木武夫	松野頼三	塩見俊二	塩見俊二	藤山愛一郎
菅野和太郎	倉石忠雄	藤枝泉介	藤枝泉介	宮沢喜一
椎名悦三郎	西村直己	赤沢正道	赤沢正道	宮沢喜一
国会議員				
【 参議院議員 】				
	・青木一男	・岩沢忠恭	・村上義一	
	・羽生三七	・伊能繁次郎		
	・青木一男	・岩沢忠恭	・早川慎一	
	・羽生三七	・伊能繁次郎		
	・青木一男	・岩沢忠恭	・堀木鎌三	
	・羽生三七	・後藤文夫		
田中清一	・青木一男	・小平芳平	・羽生三七	
	・小酒井義男			
田中清一	・青木一男	・小平芳平	・羽生三七	
	・小酒井義男			
田中清一	・青木一男	・小平芳平	・田中一	
	・小酒井義男			
田中清一	・青木一男	・近藤信一	・羽生三七	
	・江頭智			
田中清一	・青木一男	・近藤信一	・羽生三七	
	・江藤智			
田中清一	・青木一男	・羽生三七	・黒柳明	
	・米田正文			
	・青木一男	・鈴木木強	・黒柳明	
	・米田正文	・天坊裕彦		
	・青木一男	・鈴木木強	・金丸富夫	
	・黒柳明	・山内一郎		
	・青木一男	・江藤衛	・村田秀三	
	・黒柳明	・山内一郎		

◎田中清一は昭和35～40年までは参議院議員として出席した。

〔国土開発縦貫自動車道建設審議会〕の委員名簿（その一）

委員 氏名 年次	政 府 ・ 関			
	会長・内閣総理大臣	大 蔵 大 臣	建 設 大 臣	運 輸 大 臣
32年	岸 信 介	池 田 勇 人	南 条 徳 男	宮 沢 胤 勇
33年	岸 信 介	一 万 田 尚 登	根 本 竜 太 郎	中 村 三 之 丞
34年	岸 信 介	佐 藤 栄 作	遠 藤 三 郎	永 野 護
35年	岸 信 介	佐 藤 栄 作	村 上 勇	楢 橋 渡
36年	池 田 勇 人	水 田 三 喜 男	中 村 梅 吉	斉 藤 昇
37年	池 田 勇 人	水 田 三 喜 男	中 村 梅 吉	斉 藤 昇
38年	池 田 勇 人	田 中 角 栄	河 野 一 郎	綾 部 健 太 郎
39年	池 田 勇 人	田 中 角 栄	河 野 一 郎	綾 部 健 太 郎
40年	佐 藤 栄 作	福 田 赳 夫	瀬 戸 山 三 男	中 村 寅 太
41年	佐 藤 栄 作	福 田 赳 夫	橋 本 登 美 三 郎	荒 船 清 十 郎
42年	佐 藤 栄 作	水 田 三 喜 男	西 村 英 一	大 橋 武 夫
43年	佐 藤 栄 作	水 田 三 喜 男	保 利 茂	中 曾 根 康 弘
委員 氏名 年次	国 会 議 員			
	【 衆 議 院 議 員 】			
32年	小 沢 佐 重 喜 塚 田 十 一 郎	倉 石 忠 雄 和 田 博 雄	三 木 武 夫 楢 兼 次 郎	砂 田 重 政 中 島 巖
33年	川 島 正 次 郎 福 永 健 司	佐 藤 栄 作 和 田 博 雄	三 木 武 夫 楢 兼 次 郎	三 浦 一 雄 中 島 巖
34年	勝 間 田 清 一 中 村 梅 吉	竹 山 祐 太 郎 福 田 赳 夫	益 谷 秀 次 郎 楢 兼 次 郎	増 田 甲 子 中 島 七 巖
35年	川 島 正 次 郎 福 永 健 司	石 井 光 次 郎 勝 間 田 清 一	船 田 中 楢 兼 次 郎	小 金 義 照 中 島 巖
36年	前 尾 繁 三 郎 江 崎 真 澄	小 川 半 次 田 中 角 栄	山 中 吾 郎 楢 兼 次 郎	赤 城 宗 徳 中 島 巖
37年	前 尾 繁 三 郎 江 崎 真 澄	小 川 半 次 田 中 角 栄	山 中 吾 郎 楢 兼 次 郎	赤 城 宗 徳 中 島 巖
38年	前 尾 繁 三 郎 竹 山 祐 太 郎	小 川 半 次 賀 屋 興 宣	山 中 吾 郎 楢 兼 次 郎	赤 城 宗 徳 中 島 巖
39年	前 尾 繁 三 郎 石 田 博 英	藤 山 愛 一 郎 園 田 直	山 本 吾 郎 楢 兼 次 郎	三 木 武 夫 金 丸 徳 重
40年	田 中 角 栄 加 藤 清 二	前 尾 繁 三 郎 中 野 四 郎	赤 城 宗 徳 金 丸 徳 重	森 中 吾 郎 山 中 吾 郎
41年	田 中 角 栄 小 松 幹	赤 城 宗 徳 山 中 吾 郎	加 藤 清 二	中 野 四 郎
42年	福 田 赳 夫 長 谷 川 峻	椎 名 悦 三 郎 加 藤 清 二	西 村 直 己 山 中 吾 郎	辻 寛 一 鈴 木 一 一
43年	福 田 赳 夫 長 谷 川 峻	橋 本 登 美 三 郎 加 藤 清 二	大 平 正 芳 山 中 吾 郎	辻 寛 一 鈴 木 一 一

經		驗		者		
世界經濟調査会 理事長	三菱地所(株) 取締役	日興証券(株) 会長	評論家	セメント協会会長	經濟審議会委員	
木内信胤	金子源一郎	遠山元一				
木内信胤	金子源一郎	遠山元一				
木内信胤	金子源一郎	遠山元一				
木内信胤	金子源一郎	遠山元一				
木内信胤	金子源一郎		細川隆元	安藤豊禄	新居善太郎	
木内信胤	金子源一郎		細川隆元	安藤豊禄	新居善太郎	
木内信胤	金子源一郎		細川隆元	安藤豊禄	新居善太郎	
稲葉秀三 (国民經濟研究協会会長)		星埜和 (東京大学教授)	細川隆元	安藤豊禄	新居善太郎 (交通基本問題調査会委員)	
稲葉秀三		星埜和	細川隆元	安藤豊禄	松井達夫	
		星埜和	細川隆元	安藤豊禄	松井達夫	
		星埜和	細川隆元	安藤豊禄	松井達夫	
		星埜和	細川隆元	安藤豊禄	松井達夫	

関		係		官		
運輸事務次官	運輸省 自動車局長	建設事務次官	建設省 道路局長	警察庁長官	自治事務次官	經濟企画 事務次官
荒木茂久二	山内公猷	石破二郎	富樫凱一	石井栄三	鈴木俊一	上野幸七
荒木茂久二	山内公猷	石破二郎	富樫凱一	石井栄三	鈴木俊一	徳永久次
栗沢一男	国友弘康	柴田達夫	佐藤寛政	柏村信雄	小林与三次	徳永久次
栗沢一男	国友弘康	柴田達夫	高野 務	柏村信雄	小林与三次	徳永久次
朝田静夫	木村睦男	柴田達夫	高野 務	柏村信雄	小林与三次	小出栄一
朝田静夫	木村睦男	山本三郎	河北正治	柏村信雄	小林与三次	小出栄一
岡本 悟	木村睦男	山本三郎	平井 学	江口俊男	小林与三次	大堀 弘
岡本 悟	木村睦男	山内一郎	尾之内由紀夫	江口俊男	金丸三郎	松村敬一
若狭得治	坪井為次	前田光嘉	尾之内由紀夫	新井 裕	金丸三郎	中野正一
若狭得治	原山亮三	前田光嘉	蓑輪健二郎	新井 裕	柴田 護	中野正一
佐藤光夫	原山亮三	前田光嘉	蓑輪健二郎	新井 裕	柴田 護	川出千速
堀 武夫	黒住忠行	尾之内由紀夫	蓑輪健二郎	新井 裕	柴田 護	高島節男

〔国土開発縦貫自動車道建設審議会〕の委員名簿(その二)

委員氏名 年次	学 識				
	財団法人田中研究所・理事長 株式会社富士製作所・社長	日本縦貫道協会 会長	道路審議会 会長	日本道路公団 総裁	元日本開発銀行 総裁
32年	田中清一	八田嘉明	石川一郎	岸道三	小林中
33年	田中清一	八田嘉明	石川一郎	岸道三	小林中
34年	田中清一	八田嘉明	石川一郎	岸道三	小林中
35年	↑ (この間は国会議員として出席)	八田嘉明	石川一郎	岸道三	小林中
36年		八田嘉明	石川一郎	岸道三	
37年		八田嘉明	石川一郎	岸道三	
38年		八田嘉明	石川一郎		
39年			植村甲午郎 (経済団体連合会副会長)	小野 哲 (日本自動車会議所常務理事)	平田敬一郎 (日本開発銀行総裁)
40年		植村甲午郎	小野 哲	平田敬一郎	稲葉秀三
41年		植村甲午郎	小野 哲	平田敬一郎	今野源八郎
42年		植村甲午郎	小野 哲	平田敬一郎	今野源八郎
43年		植村甲午郎	小野 哲	平田敬一郎	今野源八郎

〔国土開発縦貫自動車道建設審議会〕の幹事名簿

幹事氏名 年次	官 庁					
	総理府総務官 副 長	内閣総理大臣官房 審 議 室 長	大蔵事務次官	大蔵省主計局長	農林事務次官	通商産業事務官 次
32年	田中栄一	賀屋正雄	平田敬一郎	森永貞一郎	清井 正	石原武夫
33年	藤原節夫	吉田信邦	森永貞一郎	石原周夫	塩見友之助	上野幸七
34年	佐藤朝生	大島寛一	森永貞一郎	石原周夫	塩見友之助	上野幸七
35年	佐藤朝生	大島寛一	石田 正	石原周夫	渡部五良	上野幸七
36年	佐藤朝生	江守堅太郎	石原周夫	石野信一	西村健次郎	松尾金蔵
37年	佐藤朝生	江守堅太郎	石原周夫	石野信一	西村健次郎	松尾金蔵
38年	古屋 亨	松永 勇	石野信一	佐藤一郎	伊藤正義	松尾金蔵
39年	古屋 亨	松永 勇	石野信一	佐藤一郎	大沢 融	今井善衛
40年	古屋 亨	高柳忠夫	佐藤一郎	谷村 裕	斉藤 誠	佐藤 滋
41年	古屋 亨	高柳忠夫	佐藤一郎	谷村 裕	武田誠三	山本重信
42年	堀 秀夫	橋口 収	谷村 裕	村上孝太郎	武田誠三	山本重信
43年	堀 秀夫	橋口 収	村上孝太郎	鳩山威一郎	大口駿一	熊谷典文

◎田中清一は昭和32～34年までは学識経験者として出席した。

### 37 「国会議員」を任期満了で辞任(昭和40年6月)

田中清一氏は、昭和三十四年六月、参議院議員として「全国区」に推挙されて立候補。当選して国会に登院、既述の如き国会活動を積極的に行つたが、昭和四十年六月、任期六ヶ年の満了で下野を決意された。

自民党幹部筋から「再出馬」を強く要望され、推挙した有志有力者も「更に一期を続けたい」と要望されたが、田中プラン推進の国会活動は一応目的を遂行したこと、当初から政治家になる意志はなかったと表明し、任期満了で、国会議員を辞任し、下野された。爾後は民間人として、初志の「国土計画田中プラン」の完遂を果たすと宣言されたのである。

### 38 民間人としての田中清一翁

#### (1) 「株式会社富士製作所」の創立と発展

大正七年十一月三日、大阪市にて「大阪製材機工作所」の商号で創業(製材木工機械の生産と販売)、昭和六年七月工場増設に際し、静岡県の風光明媚な清水港袖師海岸を選び「清水工場」を建設し、「精密工作機械」の生産も始めた。日常霊峰富士山を仰ぐので「富士製作所」と商号を改称する。

更に事業拡大に伴い、沼津市日の出町に近代様式の鉄骨鉄

筋コンクリート建ての白亜の工場を建設し「沼津工場」と名称し、本社工場として今日に至つた。

尚、海外輸出は漸増し「富士製品」として内外に有名となつた。

#### (2) 創業五十周年記念式典を挙行(43年11月3日)

(株)富士製作所は昭和四十三年十一月三日で創業五十周年となるので、左記の如き来賓を迎え、創立者を中心に盛大なる記念式典が挙行された。

△創業以来の内外多数の納品先企業各位

△多年の国会活動による政界の有力者各位

△財団法人田中研究所関係の顧問と役員各位

△通商産業省関係の来賓多数

△日本道路公団総裁富樫凱一氏、外各位

△「国土計画田中プラン」の各地協力推進者各位

#### (3) 「平和国家建設国土計画大綱」を発刊(45年7月15日)

△日本の高速自動車道、その発案と実現について

昭和二十年八月以来、「新日本建設」のために取り組んだ「国土計画田中プラン」の企画、構想と、この実現に努力した田中企画者の二十五年間に及ぶ詳細な記録を編集した標題の文献(二百五十頁)を印刷し、左記各位に贈呈した。

△衆議院、参議院の各位、国会事務局関係

△国土計画に注目し、期待する府、県、市、町の行政機関

△国会図書館、宮内庁、講演した各大学と学校

△財田中研究所、国土建設一円会、田中プラン協力者

#### (4) 「恵那山トンネル」の施工推進

田中翁は、国会議員から下野された昭和四十年六月から晩年を「国土計画田中プラン」の推進のため、多数の来訪者と会談され、時折出張し、完成に傾注された。中央道の最大難工事であった「恵那山トンネル」（八五〇〇m）にも格別の努力を払われた。

昭和四十八年秋季には、工事も八〇%が進捗し、今一歩で竣工開通となる時、残念ながら他界されました。

以上で「平和国家建設国土計画大綱」の概要説明と、この計画に終生取り組まれた田中清一翁のご急逝の模様を下記に記載して終章といたします。

#### 田中清一翁のご急逝

昭和四十八年十一月二十七日 午後六時（自宅にて）

この日も来客と応接室で語り合われ、午夕に田中翁の体調が急変され、畢生田中プランと取り組まれた大偉人は忽然と大往生されました。

田中翁の偉大さが痛感され、政府と中央政界で故人への追叙が手配された。

一、特旨を以て「従四位」に追叙される。

（昭和四十八年十一月二十七日）

法号・大巍院釋清邦大居士

従四位勲二等 田中清一

（享年八十一歳）

(社葬当日の経歴書)

## 故 田中清一翁経歴

出生地 福井県 大野郡 和泉村  
現住所 静岡県沼津市三枚橋日の出町四〇一  
出生日 明治二十五年九月三日

### 略 歴

一、明治三十八年三月 福井県大野郡和泉村日進小学校卒業

一、大正五年三月 大阪工業専修学校にて修学後、  
大阪市の合名会社藤田組に入社し、米国ミ  
ルウォーキ州アルスチャルマー会社の技師、  
W・リチャード氏より製材機械の操縦法及  
び機械設計法を学ぶ

### 一、工場建設と創業

一、大正七年十一月 大阪市西成区石田町一五六番地  
に工場を設け「大阪製材機工作所」の商号  
にて個人経営で創業す

一、大正十三年四月 本社及び工場を大阪市浪速区本  
津川町一丁目一番地に移設す

一、昭和六年七月 増設工場を風光明媚な静岡県袖  
師海岸に選り「清水工場」を建設す

### 二、商号改称と株式改組

一、昭和六年七月 麗峰富士を仰ぐ新工場に因み、  
商号を「富士製作所」と改称す

一、昭和十三年三月 経営組織を資本金百万円の株式  
会社に改組し、代表取締役社長に就任す

一、昭和十三年七月 事業の拡大に伴い、沼津市三枚  
橋日の出町四〇一番地に近代様式の鉄骨鉄  
筋コンクリート建の工場を建設し、「沼津工  
場」と名称す

一、昭和十六年四月 沼津工場は第一期、第二期、第  
三期の工事を続行し、全計画の完成と共に  
「本社工場」とし、資本金を参百万円に増資  
一、昭和二十年五月 大東亜戦争中、「清水工場」は戦  
時強制疎開を命ぜられ、岐阜県郡上郡白鳥  
町に全施設を移転し、以後「白凰工場」と  
呼び、今日に至る

一、昭和二十一年一月 終戦処理のため、取締役会長に  
就任す

一、昭和二十八年八月 資本金を壱千式百万円に増資す

一、昭和二十八年十一月 資本金を参千万円に増資す

一、昭和三十三年一月 資本金を六千万円に増資す

一、昭和三十三年八月 代表取締役社長に復任す

一、昭和三十五年八月 資本金を壱億円に増資す

### 三、関連会社

一、昭和二十一年十月 岐阜県の白鳳工場に隣接して、  
「富士木材興業株式会社」を設立し、取締役  
社長に就任し、現在に至る

### 四、受命事項

一、昭和十五年三月 商工省より試作奨励機として、  
「油圧式平削り盤」の試作命令を受く

一、昭和十六年一月 商工省より「油圧式平削り盤」に  
対し、総動員法により「試作研究命令」を  
受け、これを完成の結果「優良」の検定を  
受く

一、昭和十六年三月 商工省より「クランクピン研磨

盤」及び「カム研磨盤」の試作研究命令を  
受け、これを完成の結果「優良」の検定を  
受く

一、昭和十七年二月 工作機械事業法による「許可会  
社」に指定さる

一、昭和十九年二月 軍需省より「軍需会社」に指定  
さる

一、昭和二十一年八月 終戦により「賠償管理工場」に  
指定さる

一、昭和二十七年四月 同右の「賠償管理工場」の指定  
を解除さる

### 五、業界関係

一、昭和十四年十月 静岡県工作機械工業会常任理事  
に就任す

一、昭和十五年一月 静岡県清水鉄工組合組合長に就  
任す

一、昭和十八年八月 大沼津工業会会長に就任す

一、昭和三十一年二月 沼津商工会議所会頭に就任す

一、昭和三十四年九月 沼津商工会議所会頭を辞任し、

顧問に就任、現在に至る

## 六、国土計画関係

- 一、昭和十二年一月 「綜合国土計画研究所」を創立し、所長に就任す
- 一、昭和二十年八月 大東亜戦争の終戦により、直ちに「新日本建設」のため「日本再建に関する綜合国土計画」の立案に着手す
- 一、昭和二十二年三月 「平和国家建設国土計画大綱」を企画・発案して政府に提出す
- 一、昭和二十二年四月 連合軍最高司令部(G・H・Q)において「平和国家建設国土計画大綱」を審議され、これを「田中プラン」と呼ばれ、以後「天然資源局」において検討を続けられ、この実現に協力さる
- 一、昭和二十八年二月 「国土建設推進連盟」を結成、会長に就任、現在に至る
- 一、昭和三十年一月 「国土建設一円会」を結成、会長に就任、現在に至る
- 一、昭和三十年十月 「財団法人 田中研究所」を創立、理事長に就任、現在に至る

## 七、国会・政党関係

- 一、昭和三十四年六月 参議院議員「全国区」に立候補して当選、国会の議席に就く
- ◎国会・自由民主党において左記委員に就任す
- 一、参議院建設委員会(常任委員)
- 一、参議院決算委員会(常任委員)
- 一、自民党道路調査会(副会長)
- 一、自民党政調建設部会(委員)
- 一、自民党政調国防部会(副会長)
- 一、道路調査会(副会長)
- 一、国土開発縦貫自動車道建設審議会(委員)
- 一、昭和四十年六月 参議院議員「全国区」の任期六年満了と共に辞任す
- 一、昭和四十四年八月 自民党沼津支部長に就任す
- 一、昭和四十八年八月 自民党沼津支部長を辞任、名誉顧問に就任、現在に至る

## 八、天皇・皇后両陛下に拝謁

- 一、昭和二十四年 十月二十日 「平和国家建設国土計画大綱」(田中プラン)の「二〇万分の一」の立体模型及び各資料が日本橋三越の会場に陳列され、連合軍最高司令部の天然資源局長スケルク大佐の御案内にて、天皇・皇后両陛下が御台覧になられ、企画者の田中清一が拝謁を賜り、この計画につき詳細に御説明申し上げる光栄に浴した

## 九、貴賓の御来社

- 一、昭和十九年 十月三十一日 賀陽宮恒憲王殿下の御光来
- 一、昭和二十九年 十月三十一日 東久邇宮稔彦王殿下の御光来
- 一、昭和三十三年 三月二十八日 北白川宮房子内親王殿下の御光来
- 一、昭和三十四年 四月二十一日 東本願寺法主大谷光暢  
台下と智子御裏方の御光来

- 一、昭和三十五年 十月二十三日 元・清宮貴子内親王殿下と御夫君島津久永殿の御光来

## 十、表彰関係

- 一、昭和二十九年 四月十八日 多数の発明特許及び産業の功労者として「藍綬褒章」を賜る
- 一、昭和四十年十一月三日 多年に亘る国土計画にて国家に貢献および産業功労者として「勲二等」に叙せられ、「瑞宝章」の御下賜に浴す
- 一、昭和四十八年十一月二十七日 特旨を以て(従四位)に叙せらる

## 十一、社会事業関係

- 一、昭和十九年十一月 現在 伊勢神宮司庁を始め、政府、各道府県、市町村の首長及び各業界団体よりの表彰は多数につき省略
- 一、昭和十九年六月 静岡県翼賛会総務に委嘱さる
- 一、昭和四十八年 現在 日本赤十字社を始め、各種社会事業の関係は非常に多数につき省略

---

從四位  
勳二等 田中清一翁顕彰会設立趣意書

---

昭和20年、肇国以来、初めて敗戦し、狭くなった領土で「新日本建設」をするには、日本の80%が山岳高原である国土を「立体的」に利用し、先ず全国の道路を近代的な「高速自動車道」に建設し、この沿線に新都市・新農村・新工場地帯を造成し、更に沿道の各資源（森林、地下鉱物、水力）を開発し、また未利用中の資源を利用するなど、新産業を誘発する。

道路の近代化は交通のスピードアップとなり、物資の輸送を迅速化して産業を飛躍発展し、また都鄙の交通至便化にて文化の交流と、この均霑化にて文化生活の向上と、さらに行政改革が図り易くなる。

特に戦前から企画研究された食糧の「自給と自足」を重要国策として「平和国家」の建設を願望されて田中清一氏が「平和国家建設国土計画大綱」を政府に提出されてから約40年を経た今日、漸次「田中プラン」が実現し、特に多年期待した「中央道」の「恵那山トンネル」の第2線も、来る3月には竣工し、開通式が挙行される段階となったので、沿道各地では田中企画者の偉大なる功績を讃えて後世に伝えるべく「顕彰碑」や「顕彰記念像」を建立せんとする動向に対応し、有志が協力して「田中翁顕彰会」を設立する次第であります。

昭和60年1月吉日

田中清一翁顕彰会会長 齊 藤 滋与史  
(元建設大臣)

# 日本再建に貢献された田中翁顕彰の募金趣意書

平成元年11月吉日

賛助会員様

従四位・勲二等 田中清一翁顕彰会  
会長 齊藤 滋与史

田中清一翁は、昭和20年終戦による荒廃した日本国土を再建すべく『平和国家建設国土計画大綱』を企画立案し、日本国民が平和で文化的な生活ができる具体的な方策を政府に献策されました。

この方策は、先ず全国的に『高速自動車道路網』を完備して、狭い国土を立体的に使用し、国土を均衡的に開発することでありました。

昭和24年10月、昭和天皇・皇后両陛下に、田中企画者の製作した『日本全土の立体模型』（石膏製、20万分の1）を中心に国土開発の各種資料に基づき、ご説明申し上げました。

その後、幾多の難関を乗り越え、昭和32年3月、遂に『国土開発縦貫自動車道建設法』の法律となり、全国に建設が進展しました。

この『建設法』により新設された「中央高速自動車道」の沿線では、「岐阜県中津川市と長野県飯田市」に、「田中翁顕彰碑」が建立されました。

当地区におきましても、この偉大な田中翁の功績を称え後世に伝えるため、去る昭和60年に、『田中清一翁顕彰会』が組織され、前記の顕彰事業に協賛申し上げてまいりましたが、このたび地元東海地区においても『顕彰碑』を建立する運びとなりましたので、その基金の公募をお願いする次第であります。

何卒、この趣意をご理解下され、ご賛同賜りたくお願い申し上げます。

## 記

### 〔沼津インターにおける顕彰碑の建立企画〕

1. 建立場所 東名高速沼津インター入口左側角地（バス停近く）
1. 顕彰碑 「等身大の銅像」
1. 台座 「銅像台座の高さ」（2.8メートル）
1. 竣工予定 平成2年4月（除幕式、5月上旬の予定）
1. 建立費 約1,500万円（ご協賛の記念誌、除幕式費を含む）

（注） 建立する土地については、地権者加藤哲男様のご好意により借用させていただきます。

因に、田中翁は、沼津商工会議所の4代目会頭（昭和31～34年）、参議院議員（全国区）（昭和34～40年）として活躍されるとともに、榎富士製作所の創立者であり、地域産業の発展に貢献され、多くの功績を残されました。

以上

# 田中清一翁顕彰基金御芳名簿(一)

(順序不同) 昭和六十二年二月二十六日現在

衆議院議員  
(田中翁顕彰会会長)

齊藤滋与史様

不二石油株式会社代表取締役

遠藤永太郎様

医療法人

千本病院様

(株)東洋パイルヒューム管製作所社長

植松 道夫様

沼津商工会議所会頭  
(田中翁顕彰会副会長)

宇野 三郎様

植松石油商事株式会社代表取締役

植松 俊一様

元 沼津市長

原 精一様

松庫工業株式会社常務取締役

増田 博雄様

沼津中央青果株式会社代表取締役

大橋 光雄様

協同組合日本洋服  
トップチェイン理事長

後藤 成夫様

ナトリオート株式会社代表取締役

名取寛二郎様

薬王山本光寺住職

木村 光紹様

裾野市深良二四一四

松井 謙一様

丸京株式会社代表取締役会長

斉藤 克己様

沼津市商店連盟理事長

高村 實様

赤武株式会社代表取締役社長

赤堀 博様

静岡県議会議員

渡辺 新作様

東芝機械株式会社  
沼津事業所専務取締役

滝沢 正信様

公認会計士

高野 芳信様

大岡建設工業株式会社  
代表取締役社長

内野 右基様

沼津魚市場株式会社代表専務取締役

芹沢 亀夫様

富士峰建設株式会社  
代表取締役社長

長岡重弥太様

(株)加藤工務店取締役社長	加藤 寅夫様	(株)ケー・オー商会取締役会長	小沢 道春様
大藤建設株式会社取締役社長	藤崎 一郎様	川崎商事株式会社取締役社長	川崎 栄嗣様
(株)小俣組代表取締役	志村 勝幸様	山本被服株式会社取締役社長	山本 安彦様
河本法律事務所所長	河本與司幸様	吉本不動産社代表	吉本 重磨様
(株)桃中軒取締役副会長	宇野紳七郎様	秋元水産株式会社取締役社長	秋元 精一様
(有)水口園茶店代表取締役	水口 勝夫様	沼津我入道漁業協同組合組合長	芹沢 亀夫様
羽野水産株式会社代表取締役会長	羽野 重雄様	(有)竹栄亭取締役社長	和田 栄様
(株)大川螺子製作所代表取締役	大川栄太郎様	米野鶏園代表	米野 博様
沼津魚仲買商協同組合理事長	山内益次郎様	(株)市川代表取締役社長	市川 士郎様
中外電気株式会社代表取締役社長	勝又 正久様	山田自動車工業株式会社会長	山田 守男様
東海精機株式会社取締役社長	大古田 一郎様	鈴木木材販売株式会社社長	鈴木 勲様
元沼津市長令夫人	勝亦 静子様	東海精機株式会社代表取締役会長	大古田 昇様
沼津信用金庫理事長	名取栄三郎様	(株)真野鉄工所会長	真野 芳雄様

(株)沼津南ホーエー家電  
代表取締役会長

今井 三好様

津田文具店代表

津田 昌久様

(株)山口製作所社長

山口 貞造様

(有)太田酸素店代表取締役会長

太田 孝様

長谷川工業株式会社代表取締役

長谷川 正夫様

東栄商事株式会社取締役

勝間田 栄様

(株)横山製材所代表取締役

横山 開一様

(株)集組代表取締役社長

高村 豊様

渡辺酒造株式会社取締役社長

渡辺与五郎様

百 足 荘

高村 弘様

(株)大黒屋取締役社長

海野 清次様

羽切砲金代表

羽切 国生様

坂東製粉株式会社代表取締役

坂東 功一様

(株)畠山鉄工所

畠山 みさ様

沼津土木建築工業株式会社社長

鈴木 量寿様

内野鉄工所代表

内野 竹治様

西家食品有限会社代表取締役

西家 義光様

公認会計士

芹沢 哲雄様

沼津市杉崎町七―八

小沢 ふく様

〔杉崎町自治会関係〕

(株)沼食代表取締役会長

勝又 一様

三丸機械工業株式会社  
代表取締役社長

山中日出子様

〔株式会社富士製作所関係〕

清 寿 会 関 係

清水市北脇四二六

(代表幹事)

鈴木 金司様

清水市秋吉町二一五八

山梨 信夫様

清水市上力町一一一六

鈴木忠太郎様

清水市秋吉町二一二六

杉山 仁様

清水市下野一六三二八

福島 政夫様

清水市新緑町七一五

池田喜太郎様

清水市八坂町八六九一二二

川口 昇吾様

清水市入江南町七一二

佐藤 正一様

清水市梅田町九一一五

大村 久司様

清水市岡町一一一一

久保田朝男様

清水市辻町二一二二

塩津通太郎様

清水市八坂南町三一三四

塩沢 信雄様

清水市西久保三二一一二

仁木 俊成様

藤枝市青南町四一一七一

杉山 恒雄様

富士市鈴川中町九一一七

上久保佐代吉様

静岡市泉町九一二四

大石 善策様

清水市興津中町六〇九一二

伏見 武司様

岐阜県郡上郡白鳥町大島

福永 実義様

清 魂 会 関 係

沼津市大岡一八八三

(代表幹事)

横山 源治様

沼津市杉崎町九一一六

阿部 慶秋様

沼津市大岡八二〇一九

大沢 幸吉様

沼津市太田町二二三三一二七

沢野 善作様

沼津市松長二九四―二

石井 清作様

(現職関係)

沼津市西間門二六〇―二

長倉 康一様

沼津市五月町九―二七

後藤 毅様

沼津市沼北町一―一八

杉本 安正様

沼津市大岡一七八―一一

轟 宣之様

沼津市市道八七〇―一六

松本 春雄様

沼津市大岡九二八―一

田中 清朗様

裾野市平松五二九

遠藤 一夫様

裾野市富沢三七五―五五

田中 文吾様

駿東郡長泉町下土狩一二一五―三〇

加藤 貞夫様

(株)富士製作所協力会様

駿東郡長泉町下土狩六三三―一

西家 久雄様

株式会社富士製作所様

沼津市杉崎町六一五―二

友森 寛様

財団法人田中研究所様

沼津市杉崎町四―二六

瀬上 清博様

同 (理事長)

瀬上 清高様

沼津市原七七―二

堀田 久男様

同 (理事)

土橋 義廣様

沼津市大岡一八七七―一五

石川 春雄様

同 (理事)

友森 二郎様

岐阜県関市小瀬一四四

足立 正樹様

東京都北区滝野川六丁目一五―三

鈴木 鏖一様

# 田中清一翁顕彰基金御芳名簿(二)

(順序不同)

自昭和六十一年二月二十七日  
至平成二年四月三十日

衆議院議員	齊藤斗志二様	静岡瓦斯株式会社沼津支店長	原田 豊次様
沼津市長	渡辺 朗様	株式会社八百半デパート 代表取締役社長	和田 晃昌様
社団法人静岡県建設業協会会長	二宮 睦治様	旭化成工業株式会社富士支社長	小林 孝一様
大昭和製紙株式会社代表取締役社長	齊藤 公紀様	株式会社静岡銀行沼津支店長	池田 信夫様
社団法人静岡県トラック協会会長	羽切 松雄様	株式会社キミサワ代表取締役	君澤 藤一様
沼津埠頭株式会社代表取締役	岡田 吉信様	沼津信用金庫理事長	名取栄三郎様
株式会社スルガ銀行代表取締役頭取	岡野 光喜様	静岡県東部生コンクリート販売協組 理事長	増井 隆様
東京電力株式会社沼津支店長	浅川 博道様	(株)愛鷹カントリー倶楽部代表取締役	西野 譲介様
静岡市紺屋町一一一四	木曜 会 様	沼津ゴルフクラブ代表取締役	村松貴巳彦様
静岡県議会議員	日原 博様	沼津国際カントリークラブ 代表取締役	山田 恒策様
株式会社小林製作所取締役社長	小林 省吾様	沼津開発興業株式会社代表取締役	綱川 達郎様

沼津通運倉庫株式会社代表取締役社長	永倉 芳郎様	協和発酵工業株式会社富士工場 取締役工場長	中溝 喜博様
ジャトコ株式会社代表取締役社長	芹沢 良夫様	特種製紙株式会社代表取締役社長	三田 仁様
日産自動車株式会社取締役社長	久米 豊様	有限会社佐野新聞店代表取締役	佐野 寛様
株式会社西武百貨店沼津店長	斉藤 誉様	株式会社不二精機製造所 代表取締役社長	安井 五郎様
自由民主党沼津支部支部長	岡田 吉信様	合名会社濱田屋商店(平作茶屋) 代表社員	野際 フジ様
多賀義明税理士事務所所長	多賀 義明様	富士通株式会社沼津工場長	天坂 博様
(社)静岡県宅地建物取引業協会会長	加田 泰下様	沼津魚市場株式会社代表取締役	山本 敏様
(社)静岡県宅地建物取引業協会 沼津支部長	山田 勲様	株式会社久松工業所代表取締役	久松 濃様
株式会社大黒屋代表取締役社長	海野 清次様	静岡県議会議員	小坂 寿美夫様
静岡県議会議員	川口 久一様	静岡県議会議員	中山 孝治様
静岡県議会議員	宮本 讓様	静岡県議会議員	宮下 英彦様
株式会社リコー沼津事業所所長	飯田 正明様	静岡県議会議員	大胡田 光明様
羽野水産株式会社代表取締役	羽野 久雄様	静岡県議会議員	石井 茂様

静岡県議会議員	小池	政臣様	鎌倉市西鎌倉四―一五―一五	野極	英一様
駿東郡清水町長	飯田	治男様	兵庫県川西市美山台一―二―三〇	栗田	鐵次郎様
駿東郡長泉町長	高橋	正三様	沼津市岡宮六八〇―一	鈴木	公一様
三島市長	奥田	吉郎様	東洋ファイバー株式会社沼津工場 取締役工場長	村田	武様
裾野市長	市川	武様	東京都大田区田園調布四―五―一	角田	豊子様
駿東郡小山町長	田代	和男様	学校法人沼津精華学園理事長	秋鹿	敏雄様
御殿場市長	大庭	健三様	株式会社沼津朝日代表取締役社長	井上	延様
株式会社マルヤ水産代表取締役社長	増田	泰一様	土井製菓株式会社代表取締役	土井	達夫様
株式会社綾市商店代表取締役社長	綾部	滋市様	萩野機械商事株式会社取締役社長	萩野	叡様
沼津総合法律事務所所長	松岡	宏様	星野医院院長	星野	重雄様
佐政水産株式会社代表取締役社長	佐藤	隆是様	日枝神社宮司	内海	喜久司様
定輪寺住職	中村	雄爾様	株式会社東静トラベル代表取締役	鈴木	一洋様
有限会社浜作代表取締役	高梨	徳治様	有限会社ミヅホ商事代表取締役	稲葉	瑞穂様

松本市蟻ヶ崎三―三―一

井上 龍一様

岐阜県郡上郡美並村高砂九二六

古川 茂樹様

松本市北深志一―七―五

赤羽 定雄様

長門市西深川一五四二

野村 夏子様

田方郡伊豆長岡町小坂二九八

萩原 民夫様

株式会社富士製作所様

# 田中清一翁顕彰会役員名簿

(敬称略・順不同)

役名	氏名	職席	住所または所在地
顧問	徳永正利	前参議院議員(元参議院議長)	鎌倉市佐助二―一二―一七
顧問	古賀雷四郎	前参議院議員(元国務大臣)	川崎市宮前区土橋三―一六―一一
顧問	齊藤斗志二	衆議院議員	沼津市新宿町一〇―一三(沼津事務所)
顧問	二宮睦治	社団法人 静岡県建設業協会 会長	静岡市御幸町九―九
顧問	羽切松雄	社団法人 静岡県トラック協会 会長	静岡市池田一二六―四

会長	斉藤滋与史	静岡県知事(前衆議院議員・元建設大臣)	静岡市追手町九―六(静岡県庁)
副会長	渡辺朗	沼津市長(前衆議院議員)	沼津市御幸町一六―一(沼津市役所)
副会長	宇野三郎	沼津商工会議所 会頭	沼津市御幸町一四―五(商工会議所)
副会長	岡田吉信	自民党沼津支部 支部長	沼津市御幸町五―二五(自民党沼津支部)
常任理事	原精一	元沼津市長	沼津市重須二六九
同	庄司辰雄	前沼津市長	沼津市千本緑町一―三四
同	大橋光雄	自民党沼津支部 前支部長	沼津市丸子町七五二―一(沼津中央青果株)
同	山本敏	沼津魚市場株式会社 代表取締役	沼津市千本港町九六
同	渡辺新作	静岡県議会議員	沼津市馬込二―一
同	名取寛二郎	自民党沼津支部 元支部長	駿東郡清水町八幡一七―一(ナトリオート株)

役名	氏名	職席	住所または所在地
常任理事	瀬上清高	財団法人 田中研究所 理事長	沼津市杉崎町四―二六(自宅)
同	多賀義明	多賀義明税理士事務所 所長	沼津市上香貫字榎島町一三三六―一〇
同	勝又義一	株式会社 沼食 代表取締役会長	沼津市杉崎町二―三〇
同	海野清次	株式会社 大黒屋 代表取締役社長	沼津市三園町一三―一五
同	川口久一	静岡県議会議員	沼津市東原五一六―一
同	宮本讓	静岡県議会議員	沼津市大岡三八七一
理事	石井茂	静岡県議会議員	三島市芝本町九―一六
同	日原博	静岡県議会議員	富士宮市万野原新田三二五〇
同	宮下英彦	静岡県議会議員	御殿場市新橋二〇三五
同	中山孝治	静岡県議会議員	裾野市茶畑九九五
同	小坂寿美夫	静岡県議会議員	駿東郡長泉町下土狩二八六
同	小池政臣	静岡県議会議員	三島市玉沢一
同	大胡田光明	静岡県議会議員	御殿場市川柳九三
同	奥田吉郎	三島市長	三島市北田町四―四七(三島市役所)
同	大庭健三	御殿場市長	御殿場市萩原四八三(御殿場市役所)
同	市川武	裾野市長	裾野市佐野一〇五九(裾野市役所)
同	高橋正三	長泉町長	駿東郡長泉町中土狩八二八(長泉町役場)
同	飯田治男	清水町長	駿東郡清水町堂庭二一〇―一(清水町役場)
同	田代和男	小山町長	駿東郡小山町藤曲五七―二(小山町役場)
同	宇野紳七郎	株式会社 桃中軒 代表取締役副会長	沼津市大手町二―二―一

役名	氏名	職席	住所または所在地
理事	植松俊一	植松石油商事株式会社 代表取締役	沼津市西間門五六五
同	植松道夫	(株)東洋パイルヒューム管製作所 代表取締役社長	沼津市原三一五―二
同	遠藤永太郎	株式会社フジセキ 代表取締役会長	沼津市東間門一―一―一
同	川崎栄嗣	川崎商事株式会社 代表取締役社長	沼津市西条町一六八―一
同	河本与司幸	河本法律事務所 所長	沼津市三園町一―三
同	勝亦静子	勝亦干城 元市長 夫人	沼津市千本常盤町九―一
同	勝又正久	中外電気株式会社 代表取締役社長	沼津市城内添地町一九七
同	木村光紹	本光寺 住職	沼津市千本郷林一九一〇―一八五
同	後藤成夫	株式会社 ゴトー 代表取締役社長	沼津市大手町五―四―一八
同	斎藤元男	丸京株式会社 代表取締役社長	沼津市三枚橋町一四―一
同	高村実	株式会社 高村 代表取締役社長	沼津市大手町三―九―二〇
同	井上延	株式会社 沼津朝日 代表取締役社長	沼津市末広町三四
同	土橋義廣	土橋法律事務所 所長	沼津市杉崎町一―一九二
同	永倉芳郎	沼津通運倉庫株式会社 代表取締役社長	沼津市白銀町一―一
同	羽野重雄	羽野水産株式会社 代表取締役会長	沼津市春日町七五―二
同	真野芳雄	ニッキ工業株式会社 代表取締役会長	沼津市足高二九四―二二
同	松井謙一	有限会社 松井製材所 代表取締役	裾野市深良二四―四
同	増田博雄	駿東興産株式会社 代表取締役	沼津市獅子浜大久保山一―一一
同	大熊清一	沼津魚仲買商協同組合 理事長	沼津市千本港町五五―三
同	米野博	米野鶏園 代表者	沼津市上香貫仰天峰二四三六

役名	氏名	職席	住所または所在地
理事	横山源治	清魂会 代表幹事	沼津市大岡一八八三
同	鈴木金司	清寿会 代表幹事	清水市北脇四二六
同	阿部慶秋	清魂会 副幹事	沼津市杉崎町九一六
同	中村雄爾	定輪寺 住職	裾野市桃園一五四
同	増井隆	静岡県東部生コンクリート販売協組理事長	三島市一番町一五―三三二(芹沢ビル)
同	山田勲	(社)静岡県宅地建物取引業協会 沼津支部長	沼津市吉田町三三一
同	松岡宏	沼津総合法律事務所 所長	沼津市吉田町三一―三
同	綾部滋市	株式会社 綾市商店 代表取締役	沼津市千本東町一六
同	久松濃	株式会社 久松工業所 代表取締役社長	沼津市旭町一七
同	加藤哲男	(顕彰銅像建立土地提供者)	沼津市岡宮五〇七
同	植田正治	株式会社植正園 代表取締役	沼津市宮前町一八
同	茨木三夫	平井工業株式会社 沼津営業所長	沼津市大手町二七―一九
事務局	後藤毅		沼津市杉崎町一一―一一

御他界された役員

役名	氏名	職	業	ご死亡年月日
発起人	芹沢汎次郎	沼津商工会議所 副会頭	沼津魚市場株式会社 代表取締役社長	昭和60年11月8日
世話人代表常任理事	高野芳信	高野公認会計士事務所	所長	昭和63年10月13日
理事	井上章久	㈱沼津朝日	代表取締役社長	昭和63年1月15日
〃	齊藤克己	丸京株式会社	代表取締役会長	昭和63年11月5日
〃	大川栄太郎	㈱大川螺子製作所	代表取締役	昭和61年8月31日
〃	友森二郎	元富士製作所副社長	㈱田中研究所 理事	昭和63年2月24日
〃	石川春雄	㈱富士製作所	元役員	昭和62年4月28日
〃	大沢幸吉	㈱富士製作所	元役員	昭和63年3月24日
〃	今井三好	㈱イマイ	代表取締役	平成1年3月27日

茲に謹んで哀悼の意を捧げます。

# 経過報告

## ①世話人会

昭和六十年一月

一、「田中清一翁顕彰会」の結成準備

先年来より有志各位にて話し合いられてきた顕彰会の発起人として、結成の「設立趣意書」などの作成準備に入った。

一、齊藤滋与史先生の会長ご内諾

この会の会長には建設大臣をご経歴の衆議院議員、齊藤滋与史先生が衆望され、発起人幹部にて要請中のところ、ご内諾を得たので正式に発足が準備された。

昭和六十年六月一日（土）

一、「田中清一翁顕彰会」の発足（敬称略）

齊藤会長を中心に、沼津市長庄司辰雄、沼津商工会議所会頭宇野三郎、元沼津市長原精一、県議渡辺新作、元自民党沼津支部長名取寛二郎、財田中研究所理事長瀬上清高、外各氏の参席にて、正式に結成された。田中家より、田中清正、田中穂積氏が謝意を表された。

一、今後の運営方法を左記のように行う

△世話人会……必要な企画、会議の準備を行う

△役員会……本会の運営方法を協議、決定する

△事業報告……別枠に概要を記録報告する

（於 桃中軒）

昭和六十年八月二十七日・二十八日

建立状況視察

一、「田中翁顕彰碑」の建立状況を視察する

（岐阜県）中津川商工会議所、中津川市役所、建立現場へ

（飯田市）飯田商工会議所、飯田市役所、阿智役場、現場へ

（世話人代表高野氏ら四名）

昭和六十年九月三日（火）

世話人会

一、岐阜、長野両県の視察報告

一、顕彰会の基金予算と対策について

一、来る二十二日の田中翁の法要準備について

昭和六十年九月二十二日（日）

田中翁の十三回忌法要

一、齊藤会長が追悼文を朗読（田中家にて）

一、飯田市にて建立の田中翁胸像を展示（会場にて）

一、供養会場（ホテルキャッスル）多数出席、追悼する

昭和六十三年十月二十九日（日）

（本会の会計監査役）世話人代表 高野芳信氏逝去の告別式  
公認会計士高野会計事務所長で「東海税理士会会長」の有名人（勲四等）で本会の会計監査をされていたが、ご病気で療養中、ご他界された（本日、本葬）

一、同氏は岐阜県、長野県にも田中翁顕彰碑の調査に出張、

ご活躍下さった。謹んでご報告申し上げます

## ② 役員会議

昭和六十年八月二十二日(木)

於 キヤッスルホテル 出席者十七名

- 一、岐阜県、長野県の「田中翁顕彰碑」の建立状況視察の件
- 一、申し合わせ事項として左記確認

- ・発起人幹事は渡辺新作氏、世話人代表は高野芳信氏とする
- ・各会合の出席者氏名は事務局で記録保有すること

(経過報告には省略する)

昭和六十一年四月三十日(水)

於 社務所 出席者十二名

- 一、岐阜県の除幕式の状況報告
- 一、収支報告、賛助会員の増加状況
- 一、顕彰会の旅行計画について

(飯田市の建立場所・中津川・京都市墓詣など)

昭和六十二年三月十七日(火)

於 社務所

- 一、経過報告、収支報告、事業計画(承認を求めた)
- 一、沼津地区の「顕彰碑」建立の素案を具体化する件
- 一、賛助会員の増加を得る方法、その他

昭和六十三年四月二十六日(火)

於 キヤッスルホテル

- 一、経過報告、収支報告、事業計画(承認を求めた)
- 一、役員増加の報告と承認を求めた
- 一、沼津地区の顕彰碑は岐阜県、長野県の建立状況を視察し

て具体化の協議を行うことに決定する  
昭和六十三年十二月二十三日(金)

於 キヤッスルホテル 会計監査選任

- 一、岡田副会長の飯田市除幕式の状況報告
- 一、沼津地区の銅像建立趣意書を印刷作成
- 一、募金活動の方法と建立委員の決定
- 一、会計監査役を税理士「東海税理士会副会長」多賀義明氏に依頼の件

## ③ 建立委員会

平成元年三月二十二日(水)

第一回開催 於 千本・たなか

- ・渡辺・石井茂(県議)・日原(杉原秘書)・後藤成夫
- ・横山・阿部・瀬上・後藤事務局長

- 一、賛助基金の現在高報告

- 一、建立推進の方法について

平成元年六月十五日(木)

第二回開催 於 キヤッスルホテル

- 一、銅像の台座見積りの件
- 一、建立地の選定の件(三、四カ所の案)
- 一、賛助基金の目標をたてる件

(瀬上入院中にて欠席)

平成元年七月十日(月)

第三回開催 於 社務所

〔提直美先生〕出席にて

一、副会長（渡辺朗市長）・岡田副会長・渡辺県議出席

・高橋町長（長泉）より銅像制作家提直美先生を紹介される

一、設計図を回覧（日原石材の設計）

（多賀・瀬上・横山・後藤・阿部）

一、建立地（東名沼津IC付近・246街道・千本公園・富士製作所空き地など）

平成元年八月十七日（水）

第四回開催 日原石材工場見学（委員にて）

一、県議にて有力賛助会員の日原博郎見学

一、同、石材工場にて近代化設備を見学

一、同、グランドホテルを見学（接待を受ける）

（渡辺県議に随行、瀬上・後藤氏共）

平成元年九月二十一日（木）

日本道路公団 御殿場事業所参同

（高橋長泉町長も）

一、「田中翁顕彰銅像」の建立地の件にて

一、所長宇都宮史郎氏、副所長田村修男氏と会談

一、東名高速沼津IC付近の航空写真を入力

一、長泉町長高橋氏と共々渡辺県議・瀬上・後藤四名にて

平成元年九月二十五日（月）

「銅像と台座」

於 知事室 齊藤会長より発注

一、齊藤会長より、彫塑家提直美先生、日原石材・日原博氏に制作を正式に発注する

一、（立会人）岡田・渡辺県議・瀬上・多賀・後藤 五名

平成元年九月二十六日（火）

建立地の確保

於 沼津市役所 沼津市長

一、銅像建立用地（東名高速、沼津IC入口）

使用方法の接渉（管理者、植正園・植田正治氏）

一、渡辺市長・岡田副会長・渡辺・瀬上・多賀・後藤立会い

平成元年九月二十六日（火）

地権者宅訪問

（使用許諾を受ける）

一、建立地の地権者加藤まさえさん（長男、加藤哲男氏）訪問。

「平和国家の文獻」にて田中翁の偉人を知ることができたので、この銅像を建立する地面の使用を承諾する

と確答された

一、植田氏案内（渡辺県議・瀬上・後藤四名）

#### ④事業報告

昭和六十年九月二十二日（日）

一、田中清一翁の十三回忌法要

△顕彰会、沼津市長、商工会議所会頭の献花

△齊藤会長が追悼文を朗読された（田中家）

△供養会場に多数出席（ホテルキャッスル）

△飯田市に建立される「田中翁胸像」が展示された

昭和六十年十一月二十五日(月)

一、「岐阜県」「田中翁顕彰碑」の除幕式

△(建立場所) 中央高速自動車道「神坂P・A」付近

△齊藤会長の祝辞を元沼津市長原精一氏が代読された

△祝品呈上：世話人代表高野芳信氏が呈上

△祝賀会・特別懇談会(名鉄ホテル)に招待された

(瀬上・田中清正・田中穂積の五名)

昭和六十年十一月二十六日(火)

一、「長野県」恵那山トンネルを通過して

△飯田商工会議所、飯田市役所、阿智村役場を表敬訪問し、

南信地区での建立方法を視察

(原・高野・瀬上・田中穂積の四名)

昭和六十一年六月十四日(土)・十五日(日)

一、「中央高速道路」視察と京都墓参

△田中プランの有志四十五名(富士急行バス一泊二日)

△飯田市の建立予定場所を視察

△岐阜県、中津川市に建立された「顕彰碑」を見学

△恵那狭グラントホテルにて協議と懇談会

△京都市、安養寺にて田中翁追悼供養と田中翁のお墓に一

同参詣す(帰途は東名にて)

昭和六十一年十二月十五日(月)

一、「田中翁胸像」の贈呈式

△飯田市、中央道の飯田インターチェンジ付近に建立される

「田中翁胸像」は巨匠朝倉文夫先生の制作にて、特に複製

されたものを贈呈する

△代表者「飯田市、飯田商工会議所、下伊那郡町村会会長、

同商工連会会長、飯田市農協組合、商工会議所竜江支部

長の五名様様の来沼にて

△当方は副会長の沼津市長、商工会議所会頭、渡辺県議、

財田中研究所理事長・幹部一同・田中清正、田中穂積、

各氏列席

昭和六十二年三月十四日(金)・十五日(土)

一、「国土計画田中プラン」の資料展示会を開催

△沼津市文化センターにて(三日間) 多数観覧さる

△「沼津史談会」の「郷土懐古展」に出品する

△大広間に各種の資料を展示する

昭和六十二年六月十四日(土)

一、「国土計画田中プラン」のテレビ放映

△「山陽高速自動車道」の推進団体が山陽放送(株)にて制作

し、中国地方の全域に放送された

△この資料を(株)富士製作所に六月三日にTV技術者が来社

し、各種の田中プラン資料を撮影された

昭和六十三年十月六日(木)

一、飯田市「田中翁顕彰胸像」除幕式

△(建立場所) 中央道、飯田インターチェンジ付近

△齊藤会長の祝辞を副会長岡田吉信氏が代読された

△記念誌「田中清一翁」を多数受品す

△祝賀会、特別懇談会(三宜亭)に招待された

(岡田、瀬上、後藤、田中家一族出席にて)

平成元年四月十一日(火)

一、(中津川市)「田中顕彰碑」の移設式

△昭和六十年十一月二十五日、岐阜県にて逸早く建立された「顕彰碑」は、当時から建設中のバイパス道路が竣工したので、神坂P・A近接の理想的な場所へ移設された  
△中津川市長、中津川商工会議所会頭、前会頭丸山氏夫人、(丸山氏夫人)外関係者一同の参席にて厳かに神式で行われた

△記念祝宴は馬込の名亭(荻の家)にて丁重に行われた

(瀬上・後藤・田中穂積・田中文吾出席)

平成元年四月二十六日(水)・二十七日(木)

一、「田中翁顕彰銅像」建立の参考視察

△役員会にて協議された「沼津地区」の建立に関する視察を、岐阜県、長野県を「一泊二日」にて旅行した

△静岡県東部農林事務所、東部振興センター、沼津土木事務所、同維持調査課長、同工事第二課長の技術陣と各建設会社及び有志会員四十余名にて「田中翁顕彰碑」を視察した

△諏訪湖のプリンスホテル一泊。霧ヶ峰、白樺湖、名勝地を視察し、中央高速にて帰還した

平成二年二月二十四日(金)

一、田中翁銅像の地鎮祭

△午前十時、日技神社、内海喜久司宮司にて厳かに式典が行われた

△齊藤会長の代理、岡田副会長が新砂の鍬入れを行い、製

作者の提先生、台座の日原氏、地権者の代理、植正氏、工事関係者の玉串奉典が行われた(渡辺・瀬上・多賀・後藤出席)

△田中家側は田中穂積、土橋敦子、外、玉串を奉呈された

平成二年四月二十二日(日)

一、「田中翁銅像」の建立

△大安の日に、めでたく建立、実現した

△「東名高速、沼津インター」の入口に、念願の田中翁の

偉容が建立されて一同歓喜する

平成二年四月二十五日(水)

一、「記念誌」の写真撮影を完了する

△建立銅像の周辺の整理、植樹が行われたので、「みどり美術印刷」にて写真撮影が行われた

一、除幕式まで銅像を白布で包被する



元 世話人代表  
故 高野芳信氏

## 除幕式を迎えて

常任理事 多賀義明



田中清一翁の功績の偉大さは、今更を言うまでもありませんが、これを世に知らしめるべく、当時元建設大臣の斎藤滋与史先生を会長に頂き、昭和六十年田中清一翁顕彰会が発足し、多くの役員の方々が顕彰碑の実現に向かって活動

されて参りました。

その中で今回の除幕式をまたずに物故された役員の方々の御尽力を忘れる訳には参りません。特に私の前任者の高野芳信先生は顕彰会の発足以来世話人代表として、又会計監事として顕彰事業の推進に寄与されておりましたが、奇しくも飯

田市の田中翁顕彰銅像の完成の頃、昭和六十三年十月十三日永眠されました。

故高野先生は昭和十七年税務代理士法制定以来税理士業界の重鎮として、東海税理士会会長、日本税理士会連合会副会長、税理士試験委員等々の要職を歴任され、昭和四十八年には藍綬褒章を、昭和五十七年には勲四等瑞宝章を授与されました。日本税理士共済会理事長として御活躍中に病に罹られ、四ヶ月の闘病後御他界されました。

高野先生は御多忙の間を、昭和六十年八月には早速に中津川の顕彰碑の視察に赴かれる等々、常に顕彰会のために尽くされたと伺っております。

高野先生は私の人生の師であり、税理士としての理想像として教えを乞うて参りました。昭和六十年六月より先生の御指導により東海税理士会の副会長の職に就いておりましたが、高野先生の後任として、顕彰会の会計監査担当の常任理事の御指名を受けました。敬愛する高野先生の万分の一でもお役に立てばとお引受けした次第であります。

今日の田中清一翁顕彰銅像の竣工は、現在の役員の皆様のお力による事は言うまでもありませんが、物故された役員の方々の御尽力なくしてはと、深甚なる敬意を表するものであります。

この意義ある事業に常任理事として、更に編集委員までつとめさせて頂き、この上もない光栄と深く感謝申し上げます。



## 編集後記

編集委員長 瀬上清高

多年待望の「田中清一翁顕彰銅像」の建立に当たり、この「記念誌」を編集する委員を仰せつかった私たちは誠に光栄に存じ、努力いたしました。

この委員長に推挙された私は、田中翁の創立された(株)富士製作所に昭和四年に入社して社業に専念、昭和十年には東京支店長（東京駅前・丸ビル三階）として各界に活躍する場を与えられ、十三年に重役となり、田中翁が世界平和を祈念して創立された「綜合国土計画研究所」、更に「財団法人田中研究所」に、大きく公的に改組された当初から常任理事を兼務しつつ、田中プランの最初から取り組みました。

田中翁とは郷土的と縁故関係にて、入社以来から股肱的な立場で田中翁の行動には殆ど随行した経歴から、田中プランの実現に至る詳細を知悉している理由で、編纂の主役にされたいと思えます。

昭和六十年に「田中翁顕彰会」が結成されたのは、元建設大臣の衆議院議員齊藤滋与史先生が会長にご就任下さったのを機に発足し、更に一年後には「静岡県知事」にご就任されたので衆評と共に本会は飛躍的に進展し、念願の「田中翁顕彰銅像」建立には県内の各界各層から絶大なご支援を賜り、茲に除幕式を迎える運びになりましたことは齊藤会長ゆえの賜と感銘します。この基因は建立像の碑文に齊藤会長がお書き下さった田中翁の「平和国家建設国土計画大綱」の実現からと思われ、本誌にこの一部を複写し挿入した次第です。

何分にもこの実現への活動の記録は多量にて、これも一部しか掲載できなかったことをご寛容願います。

次に編集委員の渡辺新作氏は県議会や県内活動、特に本会の運営には最大級のご活躍をされ、また委員の多賀義明氏は税理士という広範多忙なお立場で本会の会計監査の重責を果されつつ、ご両氏が度々の編集会議に出席され、また日常多忙な事務局長 後藤毅氏も編集委員として会議の結論を整理して頂きました。三氏に対し心から感謝申し上げます。

また、この記念誌の印刷を担当されたみどり美術印刷株式会社の岩崎社長をはじめ、関係スタッフ一同にも謝意を表したいと思えます。

---

## 添 記 資 料

---

- ・「国土計画田中プラン」をテレビ放映 ..... 69
- ・田中翁顕彰会の視察記録 ..... 70
- ・「日本道路公団」との関連記録 ..... 72
- ・「日本道路公団」発行『みち』掲載の座談会抜粋 ... 73
- ・宮崎日日新聞記事 ..... 74
- ・静岡新聞記事 ..... 75
- ・日刊工業新聞記事 ..... 76
- ・平和国家建設国土計画大綱 ..... 77
- ・財団法人「田中研究所」役員芳名 ..... 98



## 「国土計画田中プラン」をテレビ放映

- |             |                 |
|-------------|-----------------|
| 1. 放映テレビの題名 | 「道路の政治学」        |
| 1. 放送の年月日   | 昭和63年 6月14日     |
| 1. 企 画      | 「山陽高速自動車道」の推進団体 |
| 1. 制 作      | 「山陽放送株式会社」      |

### 「テレビ放送の趣旨」

現在使用されている「中国高速自動車道」は、昭和32年に国会で成立した「国土開発縦貫自動車道建設法」により、「中国高速自動車道」（岡山・広島・山口の各県地域）は建設省、日本道路公団にて建設されたのであるが、当時よりこの「バイパス路線」として、瀬戸内海沿いに「山陽高速自動車道」の建設が要望されていたが現在の「中国自動車道」の着工が沿線となる「鳥取県・島根県」の要望も加わって、強い勢力で路線が決定され着工完成した由である。

その後、夢とされた注目の「瀬戸大橋」が実現された結果、これに伴う取付道路と共に、地域の輸送状況の激変で「山陽高速自動車道」の必要が、強く要望されるに至ったので、この実現を図る方策として、下記の如く、テレビ放映が行われたのである。

1) 昭和63年 6月 3日「山陽テレビ放送」が沼津市の富士製作所に協力を求められ、下記資料を撮影された。

- (イ) 「中央高速自動車道」の長大な俯瞰図
- (ロ) 「日本国土の立体模型」（20万分の1、石膏製）
- (ハ) 「立体模型」にて中央道の説明

### 「映画に登場する人物」

「国土計画田中プラン」企画発案者	故 田中 清一	
(田中清一氏の長男)	田中 清正	
(元)全国高速道路協会 事務局長	秋山 寛一	
建設大臣	越智 伊平	
(元)日本道路公団 総裁	高橋国一郎	
(元)参議院議員	故 青木 一男	
(元)建設省	大塚 勝美	小林 元椽
(元)神戸市長	故 原口忠次郎	
(元)鳥取県知事	故 石破 二郎	
(元)島根県土木部長	曾山 親俊	
広島県知事	竹下虎之助	
(元)岡山県知事 (参議院議員)	加藤 武徳	
(元)建設省 (参議院議員)	井上 孝	
(元)建設省	齊藤 義治	
衆議院議員 (広島) 岸派	砂原 格	
(元)広島県知事	故 永野 巖	
島根県会議員(元)竹下総理秘書	上野 整	
(元)建設大臣 (島根)	桜内 義雄	
(元)衆議院議員	藤井 勝志	
(元)建設省	吉田 喜一	

# の 視 察 記 録

## 田中翁顕彰碑・高速道路視察記録

- 平成元年 4 月 26 日～27 日  
（1泊2日・バス旅行）
- 参加人員 40名
- 沼津駅北口発－東名高速(下り)－  
中央高速－岐阜県中津川市神坂P.  
A－田中顕彰碑
- 飯田市中央高速 I. C で田中顕彰碑
- 諏訪湖 I. C－温泉ホテル 1 泊
- 翌日、白樺－蓼科(視察)－中央道  
－御殿場－沼津着



### 岐阜県の顕彰碑について

これは「恵那山トンネル」(2期線)の開通の昭和60年の秋、「中央高速道神坂P. A」付近に建立されたが、当時施工中のバイパス県道が竣工したので、「P. A」近接の理想場所に昭和53年10月に移設された。

・この顕彰碑の建立には中津川商工会議所会頭・丸山敏治氏の企画実現に至った状況と小林市長の移設のご努力など、その経過を市の地域振興調政監の大島部長が現場において詳しく説明された。



田中翁顕彰碑前の一同の記念撮影

---

---

## 田中翁顕彰会

---

---

### 長野県南信地区にて田中翁胸像を建立

建立場所＝「中央自動車道飯田  
I.C」付近「田中翁顕彰小公  
園」内



田中翁の顕彰碑を中心に、一同の記念撮影

#### 「恵那山トンネル」管理センター見学（日本道路公団名古屋管理局飯田管理事務所）

この施設は、トンネル内の「上りと下り」の通行中の自動車を監視する外、事故や異変の際には適切な指示が行える装置が施してある。

・この案内は飯田商工会議所の前会頭・鈴木明男氏が先導され、また顕彰碑の実現には専務理事の山岸英二氏が市の三井部長さんと共に多年ご苦勞されたこと、また今回の温かいご歓迎などを特記。



飯田市と商工会議所側の歓迎を受ける一行

## 「日本道路公団」との関連記録

### 1) 日本道路公団設立披露に出席 (昭和31年5月15日)

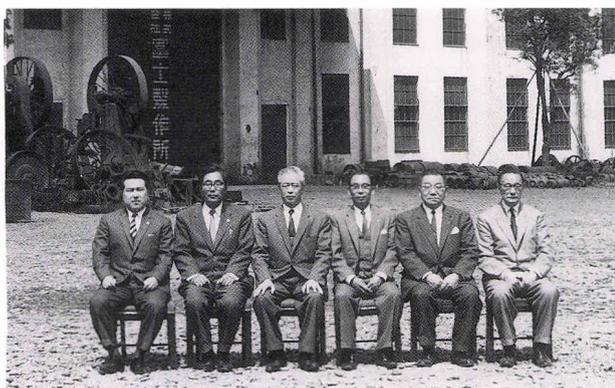
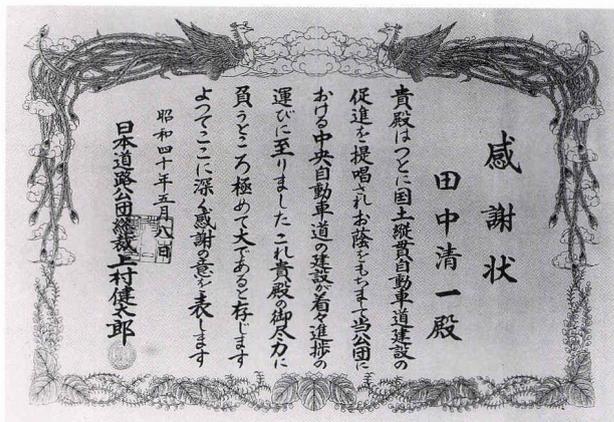
昭和30年6月2日、第22国会に提出された「国土開発縦貫自動車道建設法案」が、同年7月28日「衆議院本会議」で全会一致で可決され、「参議院」に送付されたころより、法案が成立するのを予想して準備されていた「日本道路公団」の開設披露が翌31年5月15日に行われ、田中企画者が招かれ出席された。

(この法案は昭和32年3月29日参議院本会議で成立し、4月16日「国土開発縦貫自動車道建設法」(法律第68号)で公布施行となった)

### 2) 日本道路公団総裁より感謝状 (昭和40年5月9日)

総裁上村健太郎氏より参議院議員の田中清一氏に、感謝状(写真)と記念品が副総裁佐藤寛政氏を通じて過労休養中の見舞いと共に田中家に寄せられた。

奇しくも佐藤氏は建設省の企画課長時代から田中プランに取り組み、道路公団の副総裁となられたご因縁の方で、共に感慨無量の握手をされた。



左より

三沢 浩氏 (沼津工事事務所長)

水野忠利氏 (道路公団秘書室)

副総裁 佐藤寛政氏

友森二郎 (富士製作所副社長)

瀬上清高 (富士製作所常務)

於(株)富士製作所

### 3) 日本道路公団総裁のご祝辞 (昭和43年11月3日)

(株)富士製作所創立50周年記念の式典には総裁高樫凱一氏が、ご出席され、国土計画田中プランと高速近代化の企画と実現を推進中の田中清一氏に対し、種々の道路建設法の立法化など謝辞共に社業の50周年の祝辞を申し述べられた。



昭和58年7月（季刊）  
日本道路公団（発行）

特集1 座談会（抜粋）

## 高速道路

### 二十周年を迎えて

（出席者）

（日本道路公団総裁）

（経済同友会代表幹事）

（漫画家）

（評論家）

高橋 国一郎

佐々木 隆一

横山 隆一

荒垣 秀雄

（敬称略）

◎この二十年間は、一ヶ月に十二キロのペースで高速道路が誕生

高橋 本日はお忙しいところをおいでいただきまして、まことにありがとうございます。

実は、わが国最初の高速道路が誕生したのが昭和三十八年七月十六日ですので、今年でちょうど二十周年になります。

高速道路は今や国民生活はもとより、国土の開発、産業、経済、文化の発展に欠かすことのできない大動脈となっておりますが、今年は一とつの区切りとして意義深い年であろうかと思えます。本日はこうしたことで、わが国の高速道路について、いろいろとお話を伺ってまいりたいと思えます。

横山 いま、日本の高速道路はどれぐらいできているんですか。

高橋 今年の三月、中国自動車道が全線開通しまして、国土の背骨にあたる縦貫道が概ねできあがったというところです。

横山 青森から鹿児島までつながったんですか。

高橋 いえ、正確には、東北自動車道の八幡平付近、九州自動車道の人吉付近、それと東京周辺で切れています。

横山 この前道路公団の道路視察で九州へ行ったとき、えびの市から八代の方へどんどんどんどん走ったような気がしたけど、あれは……。

◎日本の高速道路の三大特色とは

佐々木 変なことを言うようですが、このような高速道路計画が進められる背景には、外国の場合、いずれも軍事的な要因があったと思うんですが、日本の場合にはそれがありませんね。

高橋 日本の高速道路は、諸外国に比べて三つの大きな特色があると私は思うんです。第一点はさきほど申しあげた議員立法からスタートしたということ。これは世界にもかつて例がないと思います。そのきっかけは戦後間もないころ、一民間人が提唱したもので、これは田中清一さんという静岡の人ですけども、この方が日本の背骨に高速道路を一本つくって、林産資源・鉱産資源を開発して、日本の国土を豊かにしようという、当時としては夢のような構想を出したわけです。この国土開発縦貫自動車道構想というのが敗戦でうちひしがれていた日本国民に非常にアピールしました。この構想は当時のマッカーサー司令のところにもいつてますし、さらに天皇陛下の上聞にも達しているぐらいですから……。それを受けてまして国会議員が保守も革新も一緒になった超党派の四百三十名の衆議院議員でもって議員提案したのがそもそのスタートなんです。

横山 これだけの計画のものが民間から出たというのは面白いね。（以下省略）

# ハイウェイ時代 九州縦貫道開通



故・田中清一

## 背骨とロツ骨線

高速道の建設には長い歴史があった。その中で高速道を発想したのが民間人であったことはあまり知られていない。

田中清一が胸中に燃めていた高速道構想を公したのは敗戦の直後、昭和二年八月二十八日だった。戦時中から二十八年まで知られぬ田中が東通宮首相総理邸に招かれ、大半の部は横野原だ、日本を立てて厚方はかかないかと尋ねられたときである。

## 九州縦貫道開通

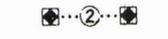
日本を縦貫する高速道路を建設し、これを「背骨」とする。また今の道路を拡幅整備し、太平洋と日本海岸の重要港湾、主要都市などをロツ骨として

# 発想は一民間人

## 荒廃した国土立て直し

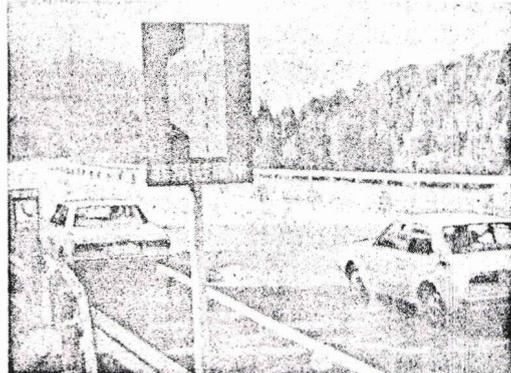
### 田中プラン

高速道の建設には長い歴史があった。その中で高速道を発想したのが民間人であったことはあまり知られていない。田中清一が胸中に燃めていた高速道構想を公したのは敗戦の直後、昭和二年八月二十八日だった。戦時中から二十八年まで知られぬ田中が東通宮首相総理邸に招かれ、大半の部は横野原だ、日本を立てて厚方はかかないかと尋ねられたときである。



### 請願に国も動く

田中は寝食を忘れ、高速道の実現に没頭。私費一億数千円を投じた、といわれる。しかし、東京大阪間の国道一号でさえ補填が珍しかった時代である。



組織が結成誕生。田中らは二十七年、国会に請願書を提出した。政府も世論も押されて、十九年、建設省に「国土開発中央調査委員会」を設け、田中もメンバーに加えられた。

### 超党派で法案

超党派の発起。政党内でも田中が要人として活躍する。

地方道は官に及ばず、県内の国道もその表面のものなデコボコ道、間でも降れば一タリの水なりが、子供達の格好の遊び場となっていた。

田中は来客、講演依頼が日ごとに多忙を極めた。請願の審議のため建設委員会にも参画して呼ばれた。当時、建設委員会が出来上がり、衆院議員、建設委員、山三郎は建設委員、田中の請願に、「発想天を飛越は建設促進を働きかける



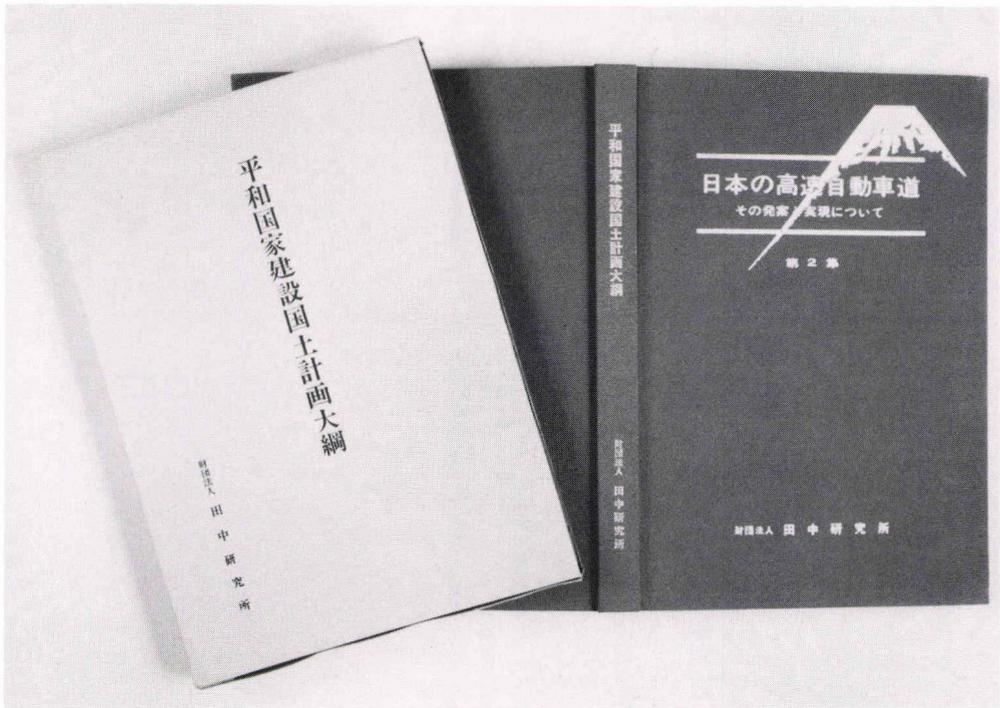


昭和四十五年七月十五日

# 平和国家建設国土計画大綱

財団法人 田中研究所

昭和45年7月15日に発刊した第2集



発刊の辞

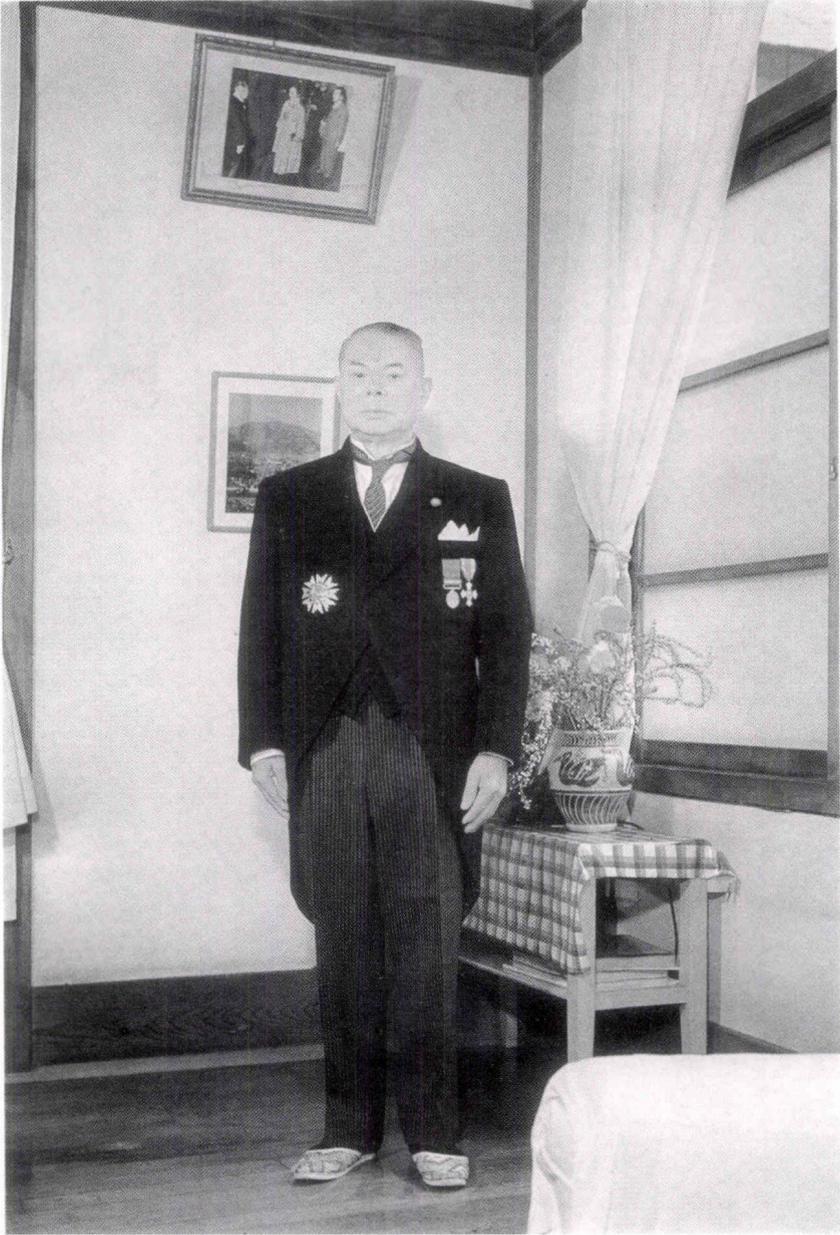
昭和二十年八月十五日、大東亜戦争の結果、わが国肇国以来初めての敗戦となって終結した悲惨に直面した私は、今後、日本国民は如何にして生きるべきか？……と沈黙考数日を過ごしました。

当時、政府も産業界も、また国民も齊しく暗澹として狼狽中に、私は「新日本建設」の方策を熟考して企画を得た頃、戦後の内閣総理大臣、東久邇宮殿下より至急上京を待つとの御招電に接し、二十八日に首相官邸へ参伺しまして日本再建の私案をお答えしたのであります。

本書は当時の私の企画と、連合国軍総司令部において「田中プラン」と銘打たれた「平和国家建設・国土計画大綱」の原文、及び主なる記録の内、原文の纏っているものを後世のために集録したものであります。

昭和四十三年十一月三日

田中清一



「勲二等瑞宝章」を佩用する国土計画・企画者の田中清一氏

# 連合軍総司令官

## マッカーサー元帥閣下

昭和二十二年四月四日

田 中 清 一

静岡県沼津市の株式会社富士製作所会長、田中清一でございます。

私は今後の日本を最も早く確実に、平和で文化の高い国家に樹てなおすためにこの書面を差し出します。

人口と食糧

日本で一番大切なことは、人口と食糧の問題であります。道義の頹廢も、思想の混乱も交通機関の混雑するのも、仕事の能率が上がらぬのも、物価が高くて苦しむのも、社会不安の根本は皆、食糧の不足から起って来るものと思ひます。

如何にしても、この人口と食糧の問題を早急に解決しなければ、我が民族の将来に対する方針が定まらないと思ひます。凡ゆる学問も芸術も、お腹が空いては始まらないのであります。

ソクラテスは食える教育をしないのは教育に非らず、と言つたが、私は政治とは食べさすことなりと信ずるのであります。

殊に第二次大戦の末期より終戦以来、日本の有様を考えましたとき、如実にそれを物語

っているのであります。

抑々、日本は肇国の昔より大和と号し農を以って国の本とせよと教えられて来たことは、好戦民族にならざるようにと、即ち戦を好む民族にならざるようにと戒められた深遠な哲理であると思えます。何となれば、人類は申すに及ばず、総ての動物は食糧があつてこそ、生存が続けられるのでありますから、生命保全のためには先ず食物であります。

この食物を各国各民族が奪い合うことは、必ず争を起す元であるから、食糧に限り自給自足して平和な生活を営ませることが、政治の妙諦であります。

人類文化の最高目標は「和む」ということであります。仁義も道德も共存共栄と言うことも、一切の極致は「和」であると信じます。故に聖徳太子は十七条憲法の初めに「和」を以って貴しと為すと教え給うたのであります。然るに日本は何が故に悲惨なる戦争を一再ならず繰返したかというに、皆人口と食糧の問題からであります。この人口と食糧の問題を誤った指導者が、誤った方針に依つて解決しようとした結果、肇国の大本を誤ったのであります。

従来、平坦にして豊穰肥沃の農耕地が軍の種々の設備となり、更に軍需工場の拡張により、不健全なる都市人口の大膨脹となつて、元来甚だしく平坦地の少ない日本は、益々農耕地が狭められ、今日の如く食糧危機を醸成する一大原因をなすに至つたのであります。狭隘なる我国土に於ける平坦肥沃の農耕地は、私共の祖先が長い年月に亘つて撓まぬ努力と汗と油の一滴一滴を流して、神仏の慈悲にも等しい努力に依つて切り開かれた沃野なの

であります。此の沃野を無碍に戦争目的、準備のために潰したり、似て非なる生産のために、例えば人類の平安なる生活には何の役にも立たず、寧ろ我が民族を不幸にする有害なる施設のために、無関心に潰してしまうことは、祖先の御恩を忘却し、人類共存共栄の見地から人道に悖る悪行爲であつたことに自ら帰結したのであります。従つて今次敗戦を契機としてよろしく平和と日本再建の大経綸を樹立し、再びかかる失敗を繰返さざるよう、百八十度の大転換をなし、一切を挙げてこの禍を転じて福となさねばなりません。それがためにはこの現実を則して、そのまま永遠の平和国家となる必須条件である食糧自給自足の大国土改良を実行することこそ、転禍為福であると信ずるのであります。

食糧の自給自足国家となることに依つて、平和民族となる、その理由は日本は何が故に軍国主義的国家になつたかと申しますに、人口と食糧の問題を解決せんがために外ならぬのであります。限られた狭隘の我が国土に於いて、人口の急激なる増加になやみ、止むに止まれず海外への進出策となり、領土拡張を意図するに立ち至つたのであります。従つて海外への進出には強力なる外交を必要とし、強力なる外交を行わんとするには、強力なる軍隊を必要とするに至つたのであります。それが事実として、私共は少年の時から人口と食糧の問題によつて、民族の将来に対する不安、国内経済の貧困ということが、頭の中に焼き鑊の如く明け暮れ、こびりついてゐるために、台湾を取つた万歳、満州国に進出したやれ万歳、と国民の多数がこれを歓迎することになつたのであります。

そこに誤まれる一部指導者の乗ずるところとなつて、軍部の独裁に等しき軍国主義国家となり、国民がそれに引きづられて来たのは、以上の理由に基づくものなのであります。

今こそ敗戦という現実を通じて真の平和日本国を建設する絶好の機会であり、千載一遇の時であると考えるのであります。

食糧の海外依存は一年間二千億円という莫大なる輸入資金を得るがために勢い、輸出優先或は飢餓輸出の名に依るソシアルダンピングを誘発する惧れがあるのであります。何となれば食糧は生命に係わるに反し、日本よりの輸出品は概ね贅沢品か不急品で生命にはかかわらないからであります。

同時に莫大なる食糧輸入は資金の面で国民生活の向上と、重要生産増進のために必要な鉄鉱石とか綿花及石油のような原料及び材料の輸入を不可能ならしめるのであります。殊に我が国に於ける石炭の埋蔵量の少なきこと、且つ近年急速なる森林資源の枯渇等、将来の燃料や動力問題を考えるとき、今直ちに治水治山のためにも、一大造林計画の実行と同時に、特に多目的ダムを建設して、水力発電計画に着手せざる時は、近き将来、鉦工業の衰退を招くばかりでなく、輸出工業に於いても長続きの見込みが立たず、従つて国民生活の低下は免れないのであります。更に現在世界に於いて、食糧輸出の能力を有する国は僅かに三、四ヶ国に過ぎず、残余の国々は、殆んど全部が食糧輸入国であります。故に、世界的飢饉又は、測らざる事態の発生をも考うるとき、食糧に限り輸入に依存することは、日本民族の生存上危険この上もなきこと、考えるのであります。

ここに於いて結論として、食糧のみは自給自足して如何なる時に於いても国民の心を常に平正に保たしめ、衣食足りて礼節を知る諺の如く、移民に於ても輸出品に於いても、諸

外国より歓迎せられる程の優秀なるもののみを送り出すことが、永遠の平和を齎す所以なりと確信するものであります。

さて狭隘なる我が国土に於いて食糧の自給自足を計るには、到底普通の常識を以つては考え及ばざる、国土改良を實行する必要があるのであります。これには先ず

皇居御造営を基として、国土計画を立てることに依つて、今後日本の歩むべき道が自ら開けて来るものと信ずるのであります。

皇居の御造営地は、北緯三十五度五分、東経百三十八度六分の地が最も相応しいと考えられています。この地域は日本の最中であり日高見にして、まことに清々しい所であります。周囲には日本アルプスの名ある秀峯聳え立ち、尊厳極りない清浄地なのであります。かかる清浄の地にか

皇居を定め、この大構想を根本としたる国土計画により、全国的に道路網を完備して、日本国土の八〇パーセントにも及ぶあの綺麗な山や高原地帯及び丘陵地帯を住宅地域となし、現在の都市として復旧しつつある大中の都市と、肥沃平坦の地を農耕地となさねばなりません。

故に第一期として着手すべき新らしき道路は、神戸より大阪を経て近江平野を通り、濃尾平野の中心を通り、岐阜県中津川より長野県飯田を経て諏訪湖に至り、旧中仙道を小諸より軽井沢に出で、高崎、足利、宇都宮を経て、那須野を通り仙台、盛岡、弘前を経て、青森に至る日本の背骨とも称すべき、一線に二十四米突幅四車線の高原地帯を通る背骨道

路を建設して、日本海及び太平洋岸の重要都市、重要港湾、重要穀倉地帯よりは、肋骨形に現在ある一級国道及び二級国道並びに府県道を拡幅、整備、完全舗装して、前記の背骨道路と連絡せしめ運輸交通の便を計り、更に背骨道路の長野県飯田より、天竜峡を経て赤石山脈中の聖嶽の南、海拔九五〇米突のところにトンネルをうがって、大井川に出て青蘆山を貫いて、富士川の支流早川に出て、身延の北、下部温泉を通って、本栖湖畔に出て精進湖、西湖、河口湖を経て、富士吉田を通り、大月、八王子を経て東京に至る直線の二十四米突幅、四車線の中央道を建設して、東京と神戸間四五〇キロ、自動車にて約四時間半の中央道を開設することが、本計画を一層有意義ならしむる最も重要な条件であります。

而してこれ等の道路に添う河川は、ことごとく米国テネシー河及びコロラド河流域開発方式に則り、多目的ダムを建設して約三百七十万キロの水力電気を開発し、超精密工業、軽工業、各種の研究試験場、諸官公庁及び上級学校、其の他の生産を伴わざる施設を、この道路に副う現在未開発の土地又は農耕不適の土地に建設して、現在の不健全なる過大都市は疎開し、かくして雄大なる大自然に触るる高原健康文化地帯となせば、住民は心身共に浄化し自ら繁栄すること、信ずるのであります。

尚この道路開設に伴って、眠れる奥地森林資源の利用、保存管理に便ならしむる外、各種の地下資源及び観光資源をも開発し、更に日本特有の丘陵地帯及草原地帯を利用して広大なる牧場を各所に設けて、国民の栄養を増進し同時に治水治山の問題と農山村に於ける次、三男対策は、以上の施設充実に依って根本的に解決出来るのであります。而して国内の南に面する平坦肥沃にして一年間二毛作を収穫し得る所は、出来得る限り農耕地となさ

ねばなりません。

御承知の如く現在の都市となりつゝ、ある大河川の川口デルタ地帯、又は海岸の沖積層は、農耕地として最も適当なことは論を要せぬ所であります。然し建築敷地としては、地盤が軟弱で不適當であります。

我が国に於いては最近百年程の間に、十数回の大地震に依る家屋の倒潰及び大火災と津波又は大洪水の災害を蒙つて、これが復興のために国民の負担は年毎に重く、国民は常に塗炭の苦しみを續けて来たのであります。今後と雖ども大地震や大洪水は、度々周期的に必ず起るものと覚悟せねばなりません。それに引き替え、高原地帯、丘陵地帯及び海拔一〇〇米突位より以上のところは、概ね地盤が堅く、建物の建築には至つて安全であり、水害の惧れもなく景色も勝れて水もよく空気も清澄であります。

これは取りも直さず、平坦肥沃にして耕すに耕し易く、然も収穫高の多い所は農耕地として耕せよとの大自然の教訓であり真理であります。

然るに日本の農耕地は五〇パーセント以上寒冷斜面の雛壇式の段々田畑でありますので一年間一毛作地が多く常に不作地なのであります。十米突も隔たずして石垣又は畦に突き当る等、牛馬による耕作ですら満足に出来ず、至つて非能率であります。殊にかゝる農耕地は冷害及び早魃にて屢々不作は免れないのであります。これが日本の現在に於ける農業の実態であります。

およそ平和国家となる第一条件である食糧自給自足の大国土改良を實行せんと欲するに

は、先ず平坦地と海拔一〇〇米突以下の所は、出来得る限り農耕地とする法律を定め、農業、漁業、製塩業、海産物採取業、造船、製鉄、海運、貿易等、之れに関連して必要な施設の外は、農業に適する地は潰さざることにしなければなりません。故に今直ちに米軍の絨毯爆撃によって戦災を受け焼野原になっている全国平坦未耕作地、及び沼沢湿地、遠浅海岸、入江など五〇万町歩を米麦二毛作地として、開発干拓すれば優に米のカロリーに換算して二千万石に相当する増収をなし得るものと思います。

従つて現在日本の主食物の収穫高を仮りに最低米五千八百万石、麦一千二百万石、計七千万石と前に述べました増収見込みの二千万石を合せて合計九千万石の最低収穫高となし、これに甘藷十五億万貫と、馬鈴薯五億万貫の収穫高を加うる時、初めて食糧に対する不安は解消し、更に牧畜及び漁獲物等の動物性蛋白、脂肪の計画的増産に依り、日本の人口が一億万人になるまでは食糧問題に付、いさ、かも心配をする必要がなくなるのであります。

今次の敗戦までは、平坦にして一年間二毛作をも収穫し得る肥沃豊穡の農耕地が、軍の諸施設とそれ等のために異常なる膨脹をなした大中の都市と軍事施設に関連する諸工場の拡張のために広大なる農耕地が潰され、それが一朝にして戦災を受け、今日尚焼野原になつて居る、此等をも農耕地とすることなのであります。

肥沃豊穡の平坦地を農耕地とすることによって、収穫高は寒冷斜面の雛段式の段々田、畑に比べて労力は三分の一にして約三倍の収穫をなし得るのであります。

例えば寒冷なる斜面の雛段式の段々田にありては、一反歩当り収穫が米一石か一石二斗に過ぎません。之に比べて平坦肥沃の農耕地は、一反歩当り収穫は優に三石乃至三石五、

六斗は収穫し得て、然も米麦二毛作が可能であり且つ冷害及び旱魃に因る不作がないのであります。

斯様な食糧自給自足の大国土改良を実行すれば、毎年食糧輸入のため外国へ支払う二千億円は、国民生活向上のために廻ることとなり、国民生活は益々豊かとなって、真に平和愛好の民族として世界平和に貢献することが出来るのであります。

尚、前に述べました道路網及び多目的ダムに依る水力発電所の建設が完成の暁には、完備せる観光施設の充実と相俟って、世界に比類稀なる理想楽園郷が出現して、国際観光客による一年間、一千億円以上の外貨獲得が可能なることは、国際観光の先進国スイスに比べて決して不可能ではないのであります。

斯くの如く日本は、景色も勝れて気候もよく空気は清く水はよし、食糧を外国より輸入する必要がなくなれば、我が日本こそ太古以来人類が待ち望んだ地上楽園の模範となるのであります。我々の愛する子孫の為に立派な平和で文化の高い国を造って贈りたいものと思ひます。

# 平和国家建設国土計画大綱

田 中 清 一

本文は昭和二十四年十月二十日平和国家建設国土計画大綱として  
天皇 皇 后 両陛下の御下問にお答えして私が御説明申し上げた大要であります。

人口と食糧

私はこの日本を最も早く確実に平和で文化の高い国家に立て直すためにお話し申し上げますと存じます。

日本で一番大切なことは申し上げるまでもなく人口と食糧の問題が真先きに取り上げられなければならないと思います。

道義の頽廢も思想の混乱も交通機関の混雑するのも、仕事の能率が上がらぬのも物価が高くて苦しむのも、社会不安の根本は皆食糧の不足から起って来るものと思います。

如何にしてもこの人口と食糧問題を早急に解決しなければ、我が民族の生存に重大なる不安を与えるものと思います。凡ゆる学問も芸術もお腹が空いては始まらない。

ソクラテスは食える教育をしないのは教育に非ず、と言ったが、私は政治とは食べさすことなりと信ずるものであります。殊に第二次大戦の末期より終戦以来日本のありさまを

考えましたとき如実にそれを物語って居るのであります。

抑々日本が肇国の昔より大和と号し農を以って国の本とせよと教えられて来たことは、戦争を好む民族にならざる様にと誠められた深遠な哲理であると思ひます。何となれば人類は申すに及ばず、総ての動物は食糧があつてこそ生存が続けられるのでありますから、生命保全の為には先ず食物であります。

此の食物を各国各民族が奪い合うことは必ず争を起す基であるから、食糧に限り自給自足して平和な生活を営ませることが政治の妙諦であります。

人類文化の最高目標は『和む』と言うことでありましょう。仁義も道德も共存共栄と言うことも一切の極致は『和』であると信ずるものであります。故に、聖徳太子は十七条憲法の初めに和を以て貴しと為すと教え給うたのであります。然るに日本は何が故に悲惨なる戦争を一再ならず繰り返したかと言うに、皆人口と食糧の問題からであります。此の人口と食糧の問題を、誤った指導者が誤った方針に依つて解決しようとした結果国の大本を誤つたのであります。

従来平坦にして豊穰肥沃の農耕地が軍の諸々の設備となり、更に軍需工場の拡張により不健全なる都会人口の大膨脹となつて、元来甚だしく平坦地の少い日本は益々農耕地が狭められ、今日の如く食糧危機を醸成する一大原因をなすに至つたのであります。

狭隘なる我国土に於ける平坦肥沃の農耕地は、私共の祖先が長年に亘り撓まぬ努力と汗と油の一滴一滴を流して、神仏の慈悲にも等しい努力に依つて切り開かれた沃野なのであります。此の沃野を無碍に戦争目的準備の為に潰したり、似て非なる生産の為に、例えば

人類の平安なる生活に何の役にも立たず、寧ろ我が民族を不幸にする有害なる施設のために無関心に潰してしまふことは、祖先の御恩を忘却し人類共存共栄の見地から天則を無視し、人道に悖る悪行爲であるから反省しなければなりません。

従つて今次敗戦を契機として宜しく平和と日本再建の大経綸を樹立し、再びかゝる失敗を繰り返すことなきよう百八十度の大転換をなし、一切を挙げてこの「禍」を転じて「福」となさねばなりません。

それが為には今直ちに永遠の平和国家となる必須条件である、食糧自給自足の大国土計画を実行することこそ、禍を転じて福とすることになるのでございます。

食糧自給国家にならざれば平和民族となり得ざる其の理由は、日本は何故に軍国主義的国家になったかと申しますに、人口と食糧の問題を解決せんが為に外ならないのであります。

限られた狭隘な国土に於て人口の急激なる増加になやみ、己むに止まれず海外への進出策となり、領土拡張を意図するに立ち至つたのであります。従つて海外への進出には強力なる外交を必要とし、強力なる外交を行わんとするには強力なる軍隊を必要とするに至つたのであります。今こそ敗戦という現実を通して眞の平和日本国を建設する絶好の機会であり、千載一遇の時であると考えるのでございます。

食糧の外国依存は一年間二千億円と言う莫大なる輸入資金調達の為、勢い輸出優先を強行する結果飢餓輸出の名に依る「ソーシアル・ダンピング」を誘発する惧れがあるのであります。何となれば食糧は生命に係わるに反し、日本よりの輸出品は概ね贅沢品か不急品

で生命には係らないからであります。同時に莫大なる食糧輸入は資金の面で、国民生活の向上と重要生産増進のために必要な原料及び材料の輸入を不可能にする惧れがあるのです。又輸出のみに依りて外貨を獲得せんとするときは、市場の争奪又は種々の事情に依りて国際的摩擦を起す元となり、摩擦を起すことは戦争を誘発する惧れがあるのであります。

殊に我国に於ける石炭の埋蔵量の少きこと、且つ近年急速なる森林資源の枯渇等将来の燃料や動力問題を考うる時、今直ちに治水治山の為にも一大造林計画の実行と同時に、特に多目的ダムを作つて大々的に水力発電計画に着手せざる時は、近き将来鉞工業の衰退を招くばかりでなく輸出工業に於ても永續の見込が立たず、従つて国民生活の低下は免れないのであります。

更に現在世界に於て食糧輸出の能力を有する国は僅かに三、四ヶ国に過ぎず、残余の国々は殆んど全部が食糧輸入国であるから、世界的飢饉又は測らざる事態の発生をも考うる時、食糧に限り輸入に依存することは日本民族の生存上危険の上もなきこと、考えるのでございます。

ここに於て結論として食糧のみは自給自足して如何なる時に於ても国民の心を常に平正に保たしめ、衣食足りて礼節を知る諺の如く、移民に於ても輸出品に於ても、諸外国より歓迎せられる程の優秀なるもの、みを送り出すことが永遠の平和を齎す所以なりと確信するものであります。

さて狭隘なる我国土に於て食糧の自給自足を計るには、到底在来の常識を以つては考え及ばざる画期的国土改良を實行する必要があるのであります。

これには先ず全国的に道路網を完備して日本国土の八十%にも及ぶあの綺麗な山や、丘陵地帯及び高原地帯を住宅地域となし、現在の都会となりつゝ、ある平坦肥沃にして、早魃もなく冷害もなき地を農耕地となさねばなりません。

故に従来の都市計画のあやまちを根本より立て直す為には、先ず第一期として着手すべき新しき道路は、神戸より大阪を経て近江平野を通り、濃美平野の中心を貫き、岐阜県中津川より長野県飯田を経て諏訪湖に至り、軽井沢、高崎、宇都宮を経て那須野を通り仙台、盛岡、弘前を経て青森に至る、所謂日本の背骨とも称すべき一線に、二十四米突幅四車線の高原地帯を通る背骨道路を建設して、日本海及び太平洋岸の重要都市、重要港湾、重要穀倉地帯よりは現在無数にある一級及び二級国道、並びに都道府県道を助骨型に拡幅強化、完全舗装して、この背骨道路と連絡せしめ運輸交通の便を計り、更に背骨道路の長野県飯田より天竜峡を経て赤石山脈中の聖岳の南、海拔九百五十メートルの所にトンネルを穿つて大井川に出で、青蘆山を貫いて富士川の支流早川に出で、身延の北、下部温泉を通りて本栖湖畔に出で、精進湖、西湖、河口湖を経て富士吉田を通り、大月、八王子を経て東京に至る、二十四米突幅四車線の中央道を建設することにより、東京大阪間に最短距離約四百三十軒、自動車にて約四時間半の中央道を開設する事が、本計画を一層有意義ならしむる最も重要な条件であります。

而して之等の道路に副う河川は、悉く米国テネシー河及びコロラド河流域開発方式に則

り、多目的ダムを建設して約三百七十万キロの水力電気を開発し、超精密工業、軽工業、各種の研究試験場、諸官公庁及び上級学校、其の他の生産を伴わざる施設を、此の道路に副う現在未開発の土地又は農耕不適の土地に建設して、現在の不健全なる過大都市は疎開し、斯くして雄大なる大自然に触る、高原健康文化地帯となせば、住民は心身共に浄化し自から繁栄すること、信ずるのでございます。

尚この道路開設に伴って、眠れる奥地森林資源の利用、保存、管理に便ならしむる外、地下資源及び観光資源をも開発し、更に日本特有の丘陵地帯及び草原地帯を利用して広大な牧場を各所に設けて国民の栄養を増進し、同時に治水治山の問題と、農山村に於ける次、三男対策は以上の施設充実に依りて根本的に解決出来るのでございます。而して国内の南に面する平坦肥沃にして、一年間二毛作を収穫し得る所は出来得る限り農耕地となさねばなりません。

御承知の如く現在の都会となりつ、ある大河川の河口デルタ地帯、又は海岸の沖積層は農耕地として最も適当なことは論を要せぬ所であります。然し建築敷地としては地盤が弱く不適當であります。

我国に於ては最近百年程の間に十数回の大地震に依る家屋の倒潰、及び大火災と津波又は大洪水の災害を蒙って、これが復興の為に国民の負担は年毎に重く、国民は常に塗炭の苦しみを続けて来たのであります。今後と雖も大地震や洪水は度々周期的に必ず起るものと覚悟せねばなりません。

それに引き替え高原地帯及び海拔百米突位より以上の所は概ね地盤堅く建物の建築には

至って安全であり、水害の惧れもなく景色も勝れて水もよく空気も清澄であります。之れは取りも直さず平坦肥沃にして耕すに耕し易く、然も収穫高の多い所は農耕地として耕せよとの大自然の教訓であり真理であります。

然るに日本の農耕地は五十%以上寒冷斜面の雛壇式段々田畑でありますので、一年間一毛作地が多く常に不作地なのであります。十米突も隔たずして石垣又は畦に突き当る等、牛馬による耕作ですら満足に出来ず、至って不能率であります。殊に斯る農耕地は冷害及び旱魃にて屢々不作は免れないのであります。之れが日本の現在に於ける農業の実態であります。

凡そ平和国家となる第一条件である、食糧自給自足の大国土計画を實行するには、先ず平坦地と海拔百米突以下の所は出来得る限り農耕地とする法律を定め、農業、漁業、製塩業、海産物採取業、造船、製鉄、海運、貿易等之れに関連して必要な施設の外は農業に適する地は潰さざることになければなりません。故に今直ちに戦災に困りて荒れ果てたる全国平坦未耕作地、及び沼沢、湿地、遠浅、海岸、入江、など五十万町歩を米麦二毛作地として開発干拓することに依って、優に米に換算して二千万石に相当する増収をなし得るのであります。

従って現在日本の主食物の収穫高を仮に最低米五千八百万石、麦一千二百万石、計七千万石と前に述べました増収見込みの二千万石を合せて、合計九千万石の最低収穫高となし、これに甘藷十五億万貫と馬鈴薯五億万貫の収穫高を加うるとき、初めて食糧に対する不安は解消し、更に牧畜及び漁獲物等の動物性蛋白質脂肪の計画的増産に依り、日本の人口が一億人になりましても食糧問題に付きいさ、かも心配をする必要がなくなるのであります。

今次の敗戦までは平坦にして一年間二毛作をも収穫し得る肥沃豊穡の農耕地が、軍の諸施設とそれ等の為に異状なる膨脹をなした大中の都市と、軍事施設に関連する諸工場の拡張の為に広大なる農耕地が潰され、それが一朝にして戦災を受け、今日尚焼野原になって居るこれ等をも農耕地とすることなのであります。肥沃豊穡の平坦地を農耕地とすることに依って収穫は、寒冷斜面の籾壇式の段々田、畑に比べて労力は三分の一にして約三倍の収穫をなし得るのであります。

例えば寒冷なる斜面の段々田にありては一反当り収穫が米一石か一石二斗に過ぎません。之れに比べて平坦肥沃の農耕地は優に三石乃至三石五、六斗は収穫し得て、然も米麦二毛作が可能であり、且つ冷害及び旱魃に因る不作がないのであります。斯様な食糧自給自足の大国土計画を實行することに依ってはじめて食糧自給国家となり、毎年食糧輸入のため外国へ支払う二千億円は国民生活向上の為に廻ること、なり国民生活は益々豊かとなって真に平和を好む民族として世界平和に貢献することが出来るのであります。

尚前に述べました道路網及び多目的ダムに依る水力発電所の建設が完成の暁には、完備せる観光施設の充実と相俟って、世界に比類稀れなる理想楽園郷が出現して、国際観光客による一年間三億ドル即ち一千億円以上の外貨獲得が可能なることは、国際観光の先進国スイスに比べて決して不可能ではないのであります。

斯くの如く我が国は景色も勝れて気候もよく、空気は清く水はよし、食糧を外国より輸入する必要がなくなれば、我が日本こそ初めて人類が待ち望んだ地上楽園の模範となるのでありますから、皆様と共に一日も早くこの国土計画を實行いたしたいと存じます。

そこでこの建設予算捻出の方法は、日本の全国民が現在八千五百万人としたしまして一人が一日一円ずつの新しい国造りの目的貯金を致しますれば、一日に八千五百万円、十日に八億五千万円、一ケ年には三百十億二千五百万円という大金が貯蓄され、この貯金を見返りに建設公債を発行して失業救済の土木工事を起すことによりまして完全雇傭が実現し、この偉大な第一期計画が数年を出でずして完成するのでございますから、我々の愛する子孫の為に立派な平和で文化の高い国を造って贈りたいものでございます。

御他界された(財)田中研究所顧問・役員の名

(顧問)

自民党副総裁	大野伴陸殿
元衆議院議長	清瀬一郎殿
元参議院議員	河井弥八殿
大阪商工会議所会頭	杉道助殿
名古屋商工会議所会頭	神野金之助殿
元国務大臣	下村宏殿
元山梨県知事	天野久殿
(理事)	
元商工大臣	中島久万吉殿
元鉄道大臣	八田嘉明殿
日本国土開発(株)社長	高木陸郎殿
元同盟通信社社長	古野伊之助殿

(理事)

元三井鉱山(株)社長	三井高修殿
元参議院議員	尾崎行輝殿
(株)平凡社社長	下中弥三郎殿
名古屋木材(株)社長	加藤周太郎殿
日本工業倶楽部 常任理事	中村元督殿
綜合国土計画研究所 常任理事	小西百一殿

(監事)

碌々産業(株)社長 野田正一殿

財団法人・田中研究所

◎以上各位は昭和三十年十月に、財団法人田中研究所が設立されてから昭和四十三年までの間に御逝去された方々でありまして、茲に謹んで哀悼の意を捧げます。

昭和43年当時の(財)田中研究所役員の名

(顧問)

衆議院議員	衆議院議員	元内閣総理大臣	衆議院議員	前防衛庁長官	日本商工会議所頭	日本観光連盟	共同テレビジョン ニュース(株)会長	日本自然保護協会 理事	大日本山林会 会長
石井光次郎	片山哲	増田甲子七	足立正	平山孝	松方三郎	田村剛	三浦伊八郎		

(敬称略・順不同)

理事長	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事
田中清一	木下道雄	安井英二	青木一男	木村公平	小汀利得	秋山真男	高野務	友森二郎	田中清正	山根清春	土橋義広	瀬上清高	野田精一	平沢久次郎

(評議員)

静岡県	同	同	同	同	長野県	同	東京都	岐阜県	愛知県	静岡県	大阪府	東京都	岐阜県
片平七太郎	松田江畔	川村太吉	近藤増次郎	平林元重	林宗重	永野常蔵	加藤鏝一	田中均一郎	豊田武松	栗田鉄次郎	野極英一	足立正樹	

(歴代の理事長)

(敬称略)

(初代) 田中 清一

昭和30年創立より

昭和48年11月27日ご他界まで

(二代) 木下 道雄

(元侍従次長)

昭和49年12月5日ご他界まで

(三代) 木村 公平

(元吉田茂首相・首席秘書官衆議院議員)

昭和51年9月27日ご他界まで

(四代) 瀬上 清高

木村理事長ご他界後より今日まで就任中

(現在の役員)

(平成二年五月)

(理事長) 瀬上 清高

昭和51年より現在まで

(理事) 野田 精一

(株)碌々産業取締役会長)

(理事) 田中 清正

(株)富士製作所取締役相談役)

(理事) 土橋 義広

(土橋法律事務所所長)

(常任理事) 田中 穂積

(株)富士製作所代表取締役)

(監事) 後藤 毅

(前富士商事(株)代表取締役)

(評議員)

松田 江畔

(静岡県) 清水市庵原町四四五

平林 元重

(長野県) 東筑摩郡波田町四四七

林 宗重

(長野県) 飯田市竜江二九九

田中清一翁顕彰銅像建立記念誌

平成二年五月十二日 印刷

平成二年五月十八日 発行

発行所 田中清一翁顕彰会

〒410 住所 沼津市杉崎町一―一一

電話 〇五五九―三三―五四八〇

印刷所 みどり美術印刷株式会社

〒410 住所 沼津市沼北町二の一六の一九

電話 〇五五九―二二―一八三九代

